

1 私を育てたあの時代、あの出会い

「人と人が真剣に向き合う」
恩師が行動で示した教育の本質

東京都渋谷区立上原中学校校長◎大江 近

特集

3 「授業」で生徒を、学級を伸ばす 第2回

言語活動で
授業を捉えなおす

4 インタビュー

めりはりをつけた言語活動で
将来を生きる力を育む

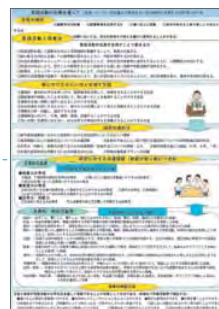
東京女子体育大理事／教授◎田中洋一



8 学校事例1

「まずやってみる」で効果を実感
独自の言語活動で指導が進化

佐賀県吉野ヶ里町立三田川中学校



14 学校事例2

年間計画や指導案のひな型を
校長が示し、全教師で練り上げる

東京都府中市立府中第三中学校

20 学校事例3

「待つ」「追い込む」「つなぐ」授業で
生徒にとことん考えさせる

高知県四万十町立窪川中学校



26 インタビュー

3校の事例から学ぶ言語活動実践のポイント

28 資料

データでみる！
中学校における指導力向上の取り組みと生徒の実態

32 読者のページ Reader's VIEW／編集後記

東日本大震災の被災者の皆さまに、心からお見舞い申し上げます。

VIEW21編集部一同

私を育てた
あの時代、あの出会い

第6回

「人と人との真剣に向き合う」 恩師が行動で示した教育の本質

東京都 渋谷区立上原中学校校長 大江 近 OE CHIKASHI

教師は日々、さまざまな働き掛けの中で生徒を育てる。そして教師は、共に働く仲間との出会いの中で育っていく。出会いから学んだ教育の原点、そして次代を担う若い世代に伝えたい不易を、大江校長が語る。

教師全員が関わることで
生徒は変わっていった

1980年代初め、教職8年目で赴任した中学校では、喫煙や器物破損が日常的に見られました。落ち着いた生徒が多かった前任校とのギャップに戸惑っていた私は、問題行動を厳しく指導しつつ、「この生徒たちと心から向き合うにはどうすべきだろう」と自問していました。そんな私に教師としての道を示してくれたのが、小川洋先生です。当時40代前半で、生活指導主任を務められていました。背筋を伸ばした毅然とした態度で、

然とした態度ながら、「おい、元気か？」といつも笑顔で生徒に声を掛ける先生で、どの生徒の話にも分け隔てなく丁寧に耳を傾け、校外でのトラブルにも駆け付けていました。生徒の誰もが「何があっても、小川先生なら力になってくれる」と信頼していたからでしょう。全校集会で小川先生がマイクを持つと、それまで騒がしかった生徒たちが一斉に静かに前を向くのです。初めてそれを目の当たりにした時、生徒の心をつかむとはこういうことかと、衝撃を受けました。小川先生は、教師に対しても行動



おおえ・ちかし 専門教科は社会科、道徳。江東区立第四砂町中学校、江戸川区立篠崎第二中学校、練馬区教育委員会、東京都教育庁指導部指導主事、義務教育心身障害教育指導課長などを経て、2007年より現職。2011年、全日本中学校長会会長に就任。

1966 (昭和41)

中学2年時に教わった先生に影響を受け、教師を志す

1975 (昭和50)

新採として江東区立第四砂町中学校に赴任

1982 (昭和57)

江戸川区立篠崎第二中学校に赴任。小川先生と出会う

1989 (平成元)

練馬区教育委員会指導主事に就任

1996 (平成8)

東京都教育庁に勤務。以後11年にわたり、特に道徳と人権教育の知見を深める。当時の先輩・仲間とは現在も年1回、宿泊を伴う勉強会で自然な議論を交わす

2007 (平成19)

渋谷区立上原中学校に校長として赴任

「教師には、 目の前の生徒を伸ばす指導を 追究する使命がある」



で範を示しました。毎日のように夜遅くまで残り、壊れた机などを修理されていきました。「いかに学校が荒れても、教師が負けてはいけない」という先生の強い気概を、どの教師も感じたのだと思います。ほぼ全員の教師が修理に加わっていました。

修理が深夜に及ぶと、皆疲れて口数が少なくなります。そんな時、小川先生は決まって大きな声でこう言いました。「明日もいい天気!」と。いかに全員の表情に気を配っているかが分かる、絶妙のタイミングでした。不思議なことに、この何気ない一言で元気が出たものです。

小川先生はよく校庭で生徒とサッカーをしていました。授業で向き合うだけでなく、生徒と教師が共に汗を流すことで、互いに理解し合える。我々教師が、もっと生徒に寄り添おう——そんなメッセージが伝わってきました。先生に続く教師は次第に増え、ついには職員室ががらがらになるほど、多くの教師が参加するまでになりました。

教師全員で生徒に関わるという雰囲気は小川先生が異動された後も学校の伝統として残り、少しずつですが確実に、生徒は変わっていききました。問題行動は減り、態度に落ちつきが見られるようになったのです。

なテーマを選び、校長としての考えを端的に伝えていきます。部活動の意義と教師の役割について書いた時は、複数の顧問の先生が「取り上げてくれてうれしい」と、喜びの感想を言いに来てくれました。文字を通して先生方との関係を深めるきっかけにもなればと考えています。

私は小川先生から、教育は人々との関わりであることを学びました。生徒とまっすぐに向き合い、自分が正しいと信じることを伝えていくことで、学校はより良くなり、ひいては平和で健全な社会の構築にもつながると信じています。ただ、意見を言うだけでは、説得力がありません。自ら進んで実践して初めて、他者の心を動かせるのです。

私が目指すのは、管理職を含めた教師全員が、どの生徒とも正面から向き合う学校です。先生方には、生徒が良いことをすれば心から褒めてほしいし、問題があれば厳しく叱ってほしい。生徒と真剣に関わってこそ、彼らが何を求めているかが見えてきます。教師には、それに応じた指導を追究する使命があるのです。そうした意識を共有できるよう、校長として、一教師として、呼び掛け続けていきたいと思っています。



「校長室通信」のタイトルは、「ささやき」「つばやき」「やまびこ」「かたらい」と毎年変え、赴任5年目の11年度は「かかわり」とした。いずれのタイトルにも、「教師が生徒がいかに働き掛けるかを考える」というメッセージを込めている

「授業」で生徒を、学級を伸ばす 第2回

言語活動で

授業を捉えなおす

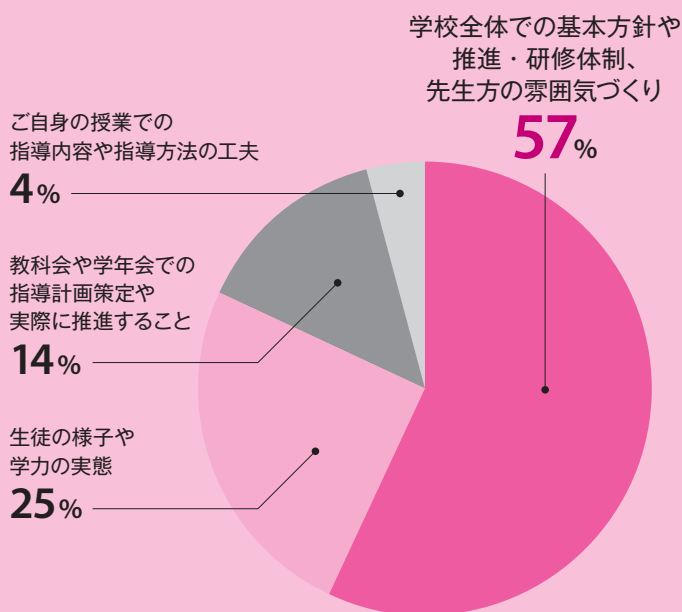
新学習指導要領のポイントである「言語活動の充実」。

子どもの日々の様子から言語活動の重要性を感じつつも

全校挙げての研究や実践には結び付いていないのが現状のようだ。

今号では、各教科等の目標達成に向けて言語活動を取り入れた授業づくりについてインタビューと学校事例から考える。

Q 言語活動の充実を図る上で、最も課題と感じていることは何ですか？



※2011年2月、全国の「VIEW21」中学版読者モニター（中学校教師）へアンケート用紙を郵送し、ファクスで回収。有効回答数は51

めりはりをつけた言語活動で 将来を生きる力を育む

東京女子体育大理事／教授 田中洋一

言語活動とはどのような活動を指し、授業にはどのように取り入れられるものなのか。指導のヒントを、言語活動に詳しい東京女子体育大の田中洋一教授にうかがった。

言語活動は 教科目標達成のための手段

これまでの日本の教育は知識の習得が中心で、応用する力や生活に役立てる実践力を育てる授業が十分ではなかった――。そのことを明らかにしたのは、2000年に始まったPIISA調査の結果です。子どもの考える力や情報活用力などが課題となり、その解決の手立ての一つとして、言語活動の充実がクローズアップされるようになりました。

先生方は、日々の生徒の様子などから言語活動の重要性を感じつつも、その目的や手法を誤解されている場合があるようです。言語活動の位置付けは、新学習指導要領の総則「教

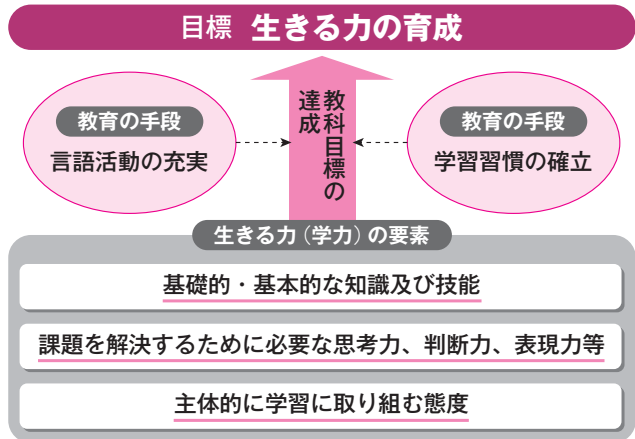
育課程編成の一般方針」を読むと分かります

(図1)。教育の最終目標は「生きる力の育成」であり、その中の「学力」の要素は「基礎的・基本的な知識・技能の習得」「課題解決に必要な思考力・判断力・表現力その他の能力」「主体的な学習態度」の三つです。つまり、この三つを育てることで生きる力を付けましょうということなのです。そこで大切なのが、「学習習慣の確立」と「言語活動の充実」なのです。

注意したいのは、言語活動はあくまで生きる力を養うための「手段」として位置付けられていることです。生きる力は各教科の授業などを通して育むものですから、言語活動は各教科などの目標を達成するための手段と言い換えられます。これがややもすると誤解さ

図1 学習意欲と学力、学習方法の有無の関係

教育課程編成の一般方針 (抜粋)
 学校の教育活動を進めるに当たっては、各学校において、生徒に生きる力をはぐくむことを目指し、創意工夫を生かした特色ある教育活動を展開する中で、基礎的・基本的な知識及び技能を確実に習得させ、これらを活用して課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力その他の能力をはぐくむとともに、主体的に学習に取り組む態度を養い、個性を生かす教育の充実に努めなければならない。その際、生徒の発達の段階を考慮して、生徒の言語活動を充実するとともに、家庭との連携を図りながら、生徒の学習習慣が確立するよう配慮しなければならない。(新学習指導要領 第1章総則 第1より)



*下線と囲みは編集部による

*田中教授の資料を基に編集部で作成

「授業」で生徒を、学級を伸ばす

第2回

言語活動で授業を捉えなおす



たなか・よういち◎横浜国立大大学院修了。専門は国語教育。東京都立中学校教諭、東京都教育委員会等の指導主事、指導室長を経て現職。中央教育審議会国語専門委員、教育課程実施状況調査結果分析委員会副主査、評価規準・評価方法の改善に関する協力者会議主査などを歴任。学習指導要領中学校国語作成協力者。著書は『国語力を高める言語活動の新展開 全4巻』（東洋館出版社）など多数

れ、言語活動の充実自体が目的とされる場合が多いようです。言語活動の視点で授業を捉え直し、工夫を凝らすことで、生徒が身に付ける力の質が変わることが重要なのです。

言葉が飛び交う授業が良い活動とは限らない

言語能力そのものやコミュニケーション能力の向上が、各教科の言語活動の目標であるかのように錯覚されている例も見受けられます。例えば、数学では、言語活動の例として「数学的な表現を用いて、根拠を明らかにし筋道立てて説明し伝え合う活動」が挙げられ

ています。これは、説明の方法そのものを学ぶことではありません。「数学的な推論の必要性と意味、及びその方法を理解し、論理的に考察し表現する能力を養う」（第2学年の例）という教科の目標を達成するための手段としてあるのです。具体的には、校庭にある木の高さを測る方法を皆で話し合うことで三角比に関する理解を深める、といった活動が挙げられます。

しかし、国語は言語教科のために少し事情が異なり、教科目標に言語能力の育成そのものも含まれます。上手に話す・聞くというコミュニケーションの技能を教える役割です。

同じく言語教科の外国語は、ペアワークなどの活動が多いため、十分に言語活動を行っていると思いがちです。しかし、活発に英語が飛び交っているように見えても、暗記した定型文を意味の理解を伴わずに口にしているだけでは、「言語や文化の理解」という教科のねらいを達成できません。ねらい達成のためには、英語の使用にこだわらず、同じ意味の日本語と英語の表現の違いを比べて、文化の差異を考えさせる活動などを取り入れるのも一案です。

言語を使って考え、人に分かるように説明したり、生徒同士で考えを共有し深め合ったりすることで、教科の内容に対する理解が深まり興味・関心を高める。その結果、教科目標に近づくことが、言語活動の効果なのです。

協調の精神や自己肯定感を育む上でも効果的

教科の目標達成以外にも、言語活動にはさまざまな効果が期待できます。言語能力やコミュニケーション能力の向上はその一つでしょう。話し合いなど友だちの考えを聞くことで、自分にはないものが相手にあるという基本認識が生まれます。また、話し合い活動を行うためには、それぞれの意見を認め合う態度が必要ですから、互いの力を生かし合う力や協調の精神を育むことも可能です。自分の意見を言わなくてはいけない状況を繰り返し

経験することで、主体的な学習態度を身に付けることも出来るでしょう。

「自分の意見を持てた」「友だちに考えを説明できた」という体験は、受け身の授業だけでは得られない自己肯定感を高めることも期待できます。そのために、生徒が自由に発言できる雰囲気づくりを心掛けましょう。授業では一つの正答を追い求めてしまいがちですが、答えが出るまで生徒を当て続けることを繰り返ししていると、生徒は間違った答えを言うのはいけないと考え、発言をためらうようになります。途中までは出来た、自分なりの意見が言えたということに対しても、教師がきちんと評価することが大切です。

ただし、これらが言語活動の主目的になると本末転倒です。言語活動はあくまで各教科の目標を達成するためにあることを忘れないでください。

「これが言語活動」と意識すれば活動内容は変わる

言語活動はこれまでにない全く新しい活動なのかと言うと、そうではありません。数学の証明問題のように、他者が理解できるように筋道立てて論を組み立てる過程は、言語活動そのものです。国語でも、ほとんどの文学鑑賞は言語活動になっています。文学は物語の展開を読み取るだけではなく、それについてどう感じたのか、主人公に共感できたかと

いうように、自分の感情や状況に置き換えて読んだり考えたりするからです。

大切なのは、教師が「これは考える力を養うための言語活動である」と意識することです。それによって教える内容は同じでも、おのずと発問の仕方や教材の作り方が変わり、授業の質も向上するのではないのでしょうか。

言語活動は時間が掛かるといイメージもあります。確かに、各教科がそれぞれ筋道立てて説明する方法や批評の仕方などを教えていたのでは、時間がいくらあっても足りません。討論や批評など言語活動に必要な基礎的な技能は、本来、国語で教えるべきものです。完璧ではなくても、国語で基本的なことを押さえておけば、例えば、音楽の授業で批評文とはどういうものかというところから説明しなくても、音楽の批評に必要な観点を教えるだけで、すぐに活動に入ることが出来ます。

限られた時数を有効活用するためには、国語科の先生は他教科でどのような言語活動を行っているかを知るようにしましょう。他教科の先生は「うちの教科はこんな活動を取り入れたいから、国語科でこのような技能を指導してほしい」と相談することも有効です。

大きな言語活動と小さな言語活動を織り交ぜてメリハリを

言語活動にメリハリを付けることも大切です。私は、言語活動には「大きな言語活動」

図2 言語活動のバリエーション

大きな言語活動

- ◎単元全体や他の教科等との連動
- ◎年1回でもよい
- ◎準備が大変だが生徒の理解度や達成感が高い

例

- 学習内容を基にした学級全体でのディスカッション
- に関する身近な使用例を探すフィールドワーク

小さな言語活動

- ◎教師の発問や教材の工夫など。日々の授業で行う
- ◎従来の指導の延長にあり、高頻度での実践が可能

例

- AとBを比較して共通点/相違点を考えさせる
- を踏まえた上で、大切だと思う点/自分の意見を考えさせる

と「小さな言語活動」があると考えています。小さな言語活動を頻繁に仕掛けながら、年1回は大きな言語活動を行うというように、大小を組み合わせることで効果が高まります(図2)。

単元全体を調べ学習にしたり、大きなテーマについて学級全体で数時間に渡りディスカッションしたりするのは、大きな言語活動です。大きな言語活動は、準備が必要であり活動に時間も掛かるので、頻繁には出来ません。一方、小さな言語活動は、自分の考えをワークシートに書かせるような活動や、授業で簡単な問いを投げ掛けて答えさせるものなどを含みます。これなら、発問の仕方を工夫するだけで毎回の授業でも取り入れられると思います。

一例を挙げましょう。社会科ではヨーロッパ

言語活動で授業を捉えなおす

パ人の生活を教材とします。「ここは試験に出るからマーカーを付けておこう」と言うのと、「前回学習した『アジア人の生活』との違いを考えながら大事な箇所にマーカーを引いてごらん」と言うのでは、授業の内容はかなり違ってきます。

言語活動では何らかのアウトプットがなければ助言や評価はしにくいので、生徒に書かせたり発表させたりすることが多いのは確かです。しかし、書いたり声に出したりすることが必須というわけではありません。言語活動の本質は、生徒に「考えさせること」にあります。書いたり話をしたりする前提として、どれだけ生徒が考えたり工夫したりしているかが大切です（図3）。

言語活動充実のヒントを教科の垣根を超えて共有する

これまで教科の評価は、知識が習得できたかどうかという点が重視されてきました。しかし、これからは生徒が自分の考えを持てたかどうかといった観点から、生徒の成長を見つめることが大切になるでしょう。たとえ正解ではなくても、自分の意見を持てたというの大切なことです。調べ学習で、いつもインターネットの情報を丸写ししていた生徒が、複数の資料を組み合わせてレポートを書くようになったら、それも大きな前進です。評価の観点や角度を少し変えることで、これま

では違う側面から生徒の成長を実感できるようにするのはないでしょうか。

私が中学校教師をしていた時も、学力を身に付けさせようと教え込みばかりになったり、一見多くの生徒に発言させていても、実は一つの正答に向かわせたりする授業をしがちでした。しかし、大学や社会で必要とされるのは、自分で課題を見つけて解決する力、必要に応じて学び続ける力、困難にめげない粘り強さや忍耐力などの力です。大学ではレポートや論文が書けるかどうか勝負ですし、社会に出れば各自で工夫や改善が出来る人材が求められます。

回り道に思えても、こうした力の土台を中学校の3年間で身に付けさせる授業こそが大切ではないでしょうか。言語活動はそのための良い学習の機会になるはずですよ。

教科の垣根を超えて

図3 言語活動を意識した授業の工夫例

あと少しで「思考を伴う」言語活動を		ひと工夫して…	「思考を伴う」言語活動に
国語	形容詞の活用形をペアワークで言い合う 説明文で筆者の言いたいことは何かを読み取る	「あの人は『かわいい』」を別の言葉に置き換え、それを具体的な場面を想像しながら言い換えて、整理する 説明文に書いてあることを踏まえて、自分はどう思うかを書く	
社会	教師が言ったポイント部分にマーカーを引く	前時の学習内容を踏まえて、大事だと思う部分にマーカーを引く	
数学	一次関数の素材を与えてグラフを書く	身近にある一次関数の例を探すことを宿題で出し、授業でそれをグラフにする	
理科	だ液の働きを調べる実験を行い、結果をワークシートに書く	だ液の働きを調べる実験を行う際に、結果を予想し、実験結果から何が分かったのかを考察し、グループ内で意見交換する	
音楽	CDを聴いて、感想を書く	楽譜を見ながらCDを聴き、「ここはスタッカートが使われているから軽やかな感じがする」など曲想を友だちと意見交換する	
美術	ゴッホやレンブラントの作品を参考に自画像を描く	自分の作品を発表し、他の生徒の作品について感じたことやアドバイスをワークシートに書く	
保健体育	サッカーゲームを楽しむ	ワールドカップのビデオを観て、一流選手の身体の動きはどうかを話し合う	
技術・家庭	情報モラルのハンドブックを読む	最近起きた著作権違反やネットワーク犯罪の事件から、なぜそれがいけないことかを話し合う	
外国語	教科書の内容をペアワークで暗唱する	教科書の表現を日本語の同じ意味の表現と比較して、なぜ異なるのかを、(日本語で)考えたり調べたりする	

先生方の知見を共有し合う場を設ければ、より多く工夫のヒントが見つかります。管理職やリーダーの先生方の主導の下、ぜひ、学校全体で言語活動を取り入れたより良い授業づくりに取り組んでいただきたいと思います。

*田中教授のインタビューを基に編集部で作成

「まずやってみる」で効果を実感 独自の言語活動で指導が進化

佐賀県 吉野ヶ里町立三田川中学校

新学習指導要領を2年前倒しして、言語活動の充実に取り組み始めた吉野ヶ里町立三田川中学校。「実践」を重視し、生徒の課題に即した「三田川中学校がとらえる言語活動」を構築した。教科横断での研修にも取り組み、学校全体の教育力の底上げを図っている。

生徒の現状

- 知識の定着と活用する力の両面に課題
- 落ち着いているが、人前で表現することや自主的に物事に取り組むことが苦手

取り組みの基本的な考え方

- 従来の教え込み中心の授業を改善することで、知識の定着と、思考力、判断力、表現力の育成の両方を目指す
- 改善の柱に言語活動を据え、校内研究を進める

取り組みの概要

- 講師を招へいし、言語活動の基礎知識を押さえる
- 授業での実践を通じて感じた課題や疑問、成果を文献で確認し、実践することを繰り返す
- 言語活動の具体例を全教科で共有し、それを基に各教科の指導計画を作成する

取り組みを続けるポイント

- 生活指導や集団づくりの要素を取り入れる
- 教師全員が納得しながら取り組めるように、まず実践してみて効果を実感し、従来の指導に自信を持ってもらう
- 授業以外の場面でも「言葉」を使う活動を組み込む（毎朝行う「今日のことば」）

公開研究会を2011年11月18日(金)に実施します

研究テーマ◎「やさしさ三田川の心で、コミュニケーションを大切に学び合う児童・生徒の育成」(小中連携・英語／言語活動の充実)
内容◎全体会、各教科の研究授業と部会、小中合同分科会、講演

School Data

◎1947(昭和22)年開校。2009年度から3年間、文科省の指定を受け三田川小学校と英語教育の小中連携を推進。吉野ヶ里遺跡を擁する歴史の町から世界へ羽ばたく人材の育成を目指す。



校長◎下川孝廣先生

生徒数◎256人 学級数◎9学級(うち特別支援学級1)

所在地◎〒842-0031 佐賀県神埼郡吉野ヶ里町吉田 303

TEL◎0952-52-2195

URL◎<http://www3.saga-ed.jp/school/edq11651/>

公開研究会◎2011年11月18日(金)

「授業」で生徒を、学級を伸ばす

第2回

言語活動で授業を捉えなおす

活用型の力の不足が課題 言語活動に活路を見いだす

吉野ヶ里町立三田川中学校は、2010年度に全教科で言語活動を導入した。そのねらいは学力向上にある。「全国学力・学習状況調査」の結果では、知識を問うA問題はほぼ全国レベルにあるものの、活用する力を問うB問題に課題があり、県の学力調査においても多くの教科が県平均を下回っていた。従来の教え込み中心の授業だけでは教科学力の向上には限界があると、教師は感じていた。下川孝廣校長は次のように話す。

「知識を詰め込むだけでは学力は定着せず、思考力や判断力、表現力も育ちません。言語活動の充実が新課程でもうたわれており、学校にとって検討が必須の課題です。校内研究のテーマにして教師全員で取り組むことによって、教師一人ひとりの授業力を高め、生徒の学力向上につなげていきたいと考えました」

教科学力の向上に加えて、生徒の主体性を伸ばす手立てとしても、下川校長は言語活動に期待を寄せる。

「本校の生徒は人前で自分を表現することが苦手で、自ら進んで取り組もうという姿勢が十分ではありません。授業中に活躍の機会を設け、主体的な学習態度や表現する力を身に付けてほしいという思いもありました」

「まずは実践してみよう」 実践主義で言語活動を体得

同校は、言語活動を教科目標達成の手立ての一つとして明確に位置付けている。佐賀大文化教育学部附属中学校で言語活動を研究した古賀勝利教頭はこう強調する。

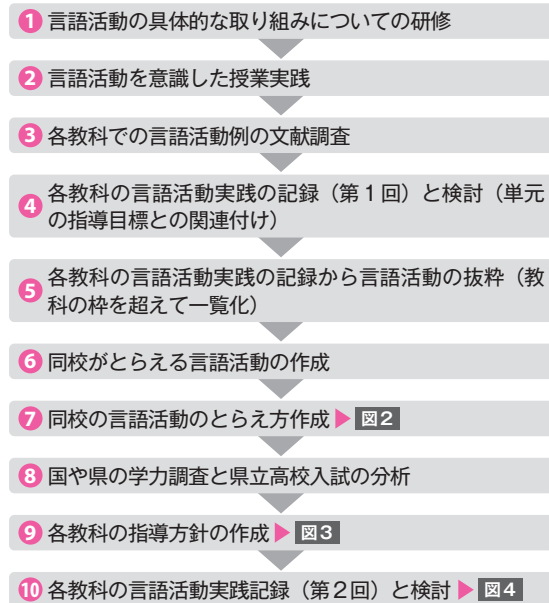
「各教科の授業で行う言語活動は、各単元の目標や流れに合わせて組み込んでいきます。単に話し合いや発表の場を設けるだけでは意味がありません」

同校では言語活動を4領域に分類。授業の目的や意図に応じて領域を組み合わせる。

- ① 思考操作：マッピングや比較・構成・分類などを行う
- ② 言語操作：記録する、調べる、読み取る
- ③ 言語運用：発表や表現、説明、振り返り
- ④ 交流：話し合いや問答、相互モニタリング

今でこそ言語活動は授業に定着しているが、その道のりは平坦ではなかった(図1)。当時は先行事例がほとんどなく、解説書も少なかったため、同校は教師自身が実践しながら言語活動とは何かを体得していく方法を取ることにした。古賀教頭や外部講師による研修を行い、活動の意義や目的を明確にした上で、教

図1 言語活動の取り組みの流れ



*同校の資料を基に編集部で再構成

師全員が授業に言語活動を取り入れた。研究主任の日吉政治先生は次のように振り返る。「まずは実践してみよう」というのが本校の



吉野ヶ里町立三田川中学校
日吉政治 Hiroyoshi Masaharu
研究主任。理科担当。「人から言われたまま動くのではなく、自分で考えて行動できる生徒を育ていきたい」



吉野ヶ里町立三田川中学校教頭
古賀勝利 Koga Katsutoshi
「他者を認め、周りの人と調和しながら、のびのびと自己表現できる子どもを育てたい」



吉野ヶ里町立三田川中学校校長
下川孝廣 Shimokawa Takahiro
「豊かに自律、たくましく自立」。自主性と判断力を身に付けた生徒を育てたい」

方針です。『教科目標を達成する』という目的だけはぶれないように気を付けながら、自分たちが思う言語活動を実践しました」

実践後は文献調査(*)をし、活動は適切であったか、活動相互のつながりはどうすべきかなどを理論面から確認。そこで得た知見を授業に反映し、指導の改善を図るというサイクルを繰り返した。目の前の生徒の課題に即した実践から生み出される言語活動だからこそ、学校の力となり、教師が継続できる指導が可能となった。

全教科の言語活動を一覧に集約 年間指導計画づくりの基準に

これらの成果を踏まえ、各教科で行った言語活動を洗い出し、その活動は本当に言語活動なのか、単元の指導目標を達成するために効果的かなどを勘案。先述の4領域(P.9)ごとに教科の枠を超えて分類し「三田川中学校がとらえる言語活動」にまとめた(図2)。これらの活動をより現実の課題に即したものとするために、「全国学力・学習状況調査」と県の学習状況調査において正答率の低い問題を抽出して課題を明らかにし、解決を図るための言語活動の方法を探った。そして、各教科で領域・学年ごとに行う言語活動を明確にし、3年間を見通した系統的な指導を行う基本方針をつくり上げた(図3)。

こうした作業を経て、研究開始から1年後

図2 三田川中学校がとらえる言語活動

思考操作	言語操作	言語運用・交流
<ul style="list-style-type: none"> 〇〇をするためにマッピングする <ul style="list-style-type: none"> 自分が知っている情報を集めるためにマッピングする 〇〇するための観点をみつける <ul style="list-style-type: none"> 情報を整理するための観点をみつける 〇〇を構成する <ul style="list-style-type: none"> 説明する文章の順序を構成する 〇〇を比較する <ul style="list-style-type: none"> 有理数と無理数の無限小数を比較することで違いを見いだす 日本とアメリカの農業を比較する 豆電球の前後の電流の大きさを比較して違いを見いだす 仮説の真偽を検討するために、仮説と結果を比較する 友達の作品と自分の作品を比較する 表やグラフを用いて栄養の特徴を比較する 各グループの献立を比較する 〇〇と〇〇を関連付ける <ul style="list-style-type: none"> 仮説の真偽を検討するために、現象と原因を関連付ける 〇〇に気付く <ul style="list-style-type: none"> 立場によってものの使いやすさが異なることに気付く 〇〇を分類する <ul style="list-style-type: none"> 観点別に情報を分類する 〇〇を予想する <ul style="list-style-type: none"> 降水量のグラフをもとに、農業の分布を予想する 〇〇を追及する <ul style="list-style-type: none"> 電卓を利用し、逐次近似値的に追及する 	<ul style="list-style-type: none"> 〇〇をつかって記録する <ul style="list-style-type: none"> 実験結果を表やグラフで記録する 〇〇しながら聞く <ul style="list-style-type: none"> 情景を想像しながら聞く 〇〇を読み取る <ul style="list-style-type: none"> 情報の中心となるものを考えながら読む 地図から日本の位置を読み取る 面積のバランスに関する約束事を読み取る 石油の分布を読み取る アメリカの割合をグラフから読み取る 〇〇を箇条書きに書く <ul style="list-style-type: none"> 絵を見て、色の対比について気付いたことを箇条書きに書く アメリカの学生に尋ねたいことのキーワードを列挙する 〇〇を調べる <ul style="list-style-type: none"> 曲の構造的要素を調べる 食品に含まれる栄養素について、食品成分表をもとに調べる 〇〇を評価し合う <ul style="list-style-type: none"> 捕球姿勢や投球のポイントをもとに、互いの活動を評価し合う 〇〇を振り返る <ul style="list-style-type: none"> ねらいに沿った活動の振り返りを行い、次の活動へどのようにいかなのかを考える 	<ul style="list-style-type: none"> 〇〇するために〇〇を書く <ul style="list-style-type: none"> 説明するために文章を書く 根号の中を簡単な数にする途中の式を書く 問題解決の流れで課題解決レポートを書く アメリカの学生に質問するための原稿を書く 相手にわかりやすく説明するための説明文を書く アメリカの地図から断面図を書く 〇〇を表現する <ul style="list-style-type: none"> 日本の範囲を表現する さまざまな地方区分を用いて表現する 方程式の考え方を利用して表現する 分母の有理化を段階的に表現する 〇〇について話し合う <ul style="list-style-type: none"> 題材について話し合う 感性的側面からの曲のイメージを話し合う 仮説を立てるために、個々の意見をもとに話し合う さまざまな地方区分が存在する理由について話し合う 題材について話し合う グループで中心的に尋ねたいことを話し合って決める 〇〇を説明する <ul style="list-style-type: none"> 緯度や経度の既習の知識を用いながら説明する 経済発展に欠かせないことを説明する 多民族国家の理由を説明する アメリカの特徴を説明する 平方根の意味に基づいて大小比較を説明する 有理数でないことを背理法で説明する ヘアで問題を作り解き合い説明する 等しくならぬことを根拠を明らかにして説明する ポイントを絞って説明する 〇〇で問答する <ul style="list-style-type: none"> 訪問した場所などについて英語で問答する 〇〇を発表する <ul style="list-style-type: none"> 理由を添えて話し合ったことを発表する 参考となる点を発表する 〇〇を振り返る <ul style="list-style-type: none"> 自分の言葉で感想を書き題材を振り返る 〇〇をまとめる <ul style="list-style-type: none"> 食品群と栄養素のかわりをまとめる 〇〇で出題し合う <ul style="list-style-type: none"> グループ内で出題し合う 〇〇に紹介する <ul style="list-style-type: none"> 友人を紹介する文を書き、友人に紹介する

*同校の資料を基に編集部で作成。下線は言語活動に関する部分

*主な参考・調査文献は『学習指導要領解説』(文部科学省)、『「言語力」を育てる授業づくり・中学校』(図書文化社)、『各教科等における言語活動の充実』(教育開発研究所)

「授業」で生徒を、学級を伸ばす

第2回

言語活動で授業を捉えなおす

同校が行う言語活動を、6月に行われた社

言語活動を意識したら ワークシートの作り方も変化

の10年度末には、どの教師も「言語活動実践の記録」を作成して活動の有効性を検討するまでに至った（P.12 図4）。

「初めは『話し合う』『発表する』くらいしか案が出ませんでした。実際に活動をするときさまざまな方法があると分かりました。何よりも有意義だったのは、決して新しい取り組みばかりではないと分かったことです。理科で複数の現象を比較させたり、体育で試合前に作戦を立てたりといった活動は、従来、授業で行ってきたことです。自分たちの指導は間違っていないかったという安心や自信にもつながりました」（日吉先生）

研究授業の方法も工夫した。各教科の指導方針は多種多様であり、校内で公開授業や研究会を行う際、議論の焦点を絞りにくい。学校全体の取り組みにするためには、教科横断で協議を行うための工夫が必要だった。

「各教科の言語活動を横断的に検証した結果、どの教科でも大事な要素として『話し合うこと』『説明すること』の二つが挙げられることが分かりました。そこで、研究協議の際には、異なる教科でも共通の土台で議論できるように、この二つのいずれかを授業に盛り込み、協議の柱にしました」（日吉先生）

図3 各教科の指導方針 国語の例

領域 話すこと・聞くこと		領域 書くこと	
学年	今後の指導方針と導入する言語活動(学習活動)	学年	今後の指導方針と導入する言語活動(学習活動)
全学年	<ul style="list-style-type: none"> 話された内容を、話し手の目的を意識して聞き取る 話し合いの場において、自分の意見をわかりやすく伝える 話し合いの目的に沿った自分の提案ができる 	全学年	<ul style="list-style-type: none"> わかりやすい説明をする能力を育成するための言語活動に重点化して単元を構想し実践する 目的に応じたメディア（言語を用いる媒体—新聞、パンフレット、リーフレット等）や文章の形態を意識させた言語活動を行う
1年	<ul style="list-style-type: none"> 話された内容について話し手や聞き手の目的に応じたメモの取り方を学習させる 日常生活の中で話題を題材にしたスピーチをする場を設定し、メモを作ることで構成を考えて話させる 話し合いの役割や方法を身につけさせる 	1年	<ul style="list-style-type: none"> 目的に応じてとったメモの情報を、多様な目的（相手を設定する、三つのキーワードで再構成する、自分の体験や考えを入れて再構成する、小学生にわかるように再構成する等）を設定し再現させる パンフレットやリーフレットの特徴を理解させ、目的を設定して教科書教材の内容をパンフレットやリーフレットに再構成させる 非連続テキスト（図表）からわかることを文章で説明させる
2年	<ul style="list-style-type: none"> インタビューで取材することを通して、目的に沿って質問を考え、テーマに関する情報を収集し、自分の考えを持たせる 自分の考えを述べるために、資料を使うことが有効であることを学習させ、効果的に使わせる 話し合いの形態（ディベート、パネルディスカッション等）を実践することで学習させる 	2年	<ul style="list-style-type: none"> 調査報告文や記録報告文の執筆を行う言語活動を導入する。目的に応じた文章の型を知識としてもち、それを活用して執筆活動を行う。また、まとまった文章をもとに資料を作成し、それをもとにして発表会を行う。その際、同じ報告文をもとにして、目的を変えた資料を作成した発表も行わせる 資料を作成する条件として、調査や記録したデータを非連続テキストを使って表現させ、それを活用して報告文の執筆や発表を行わせる 新聞のメディアとしての特徴を理解させ、職場体験を通して知ったことや考えたことを新聞形式にまとめさせる
3年	<ul style="list-style-type: none"> 話し合いについて計画を立てて実践する学習活動を通して、自分の考えや意見を話したり意見を比較して聞いたりすることで、話し合いの目的に沿った提案をしたり、柱に沿った質問をしたりすることを目的とする 	3年	<ul style="list-style-type: none"> 説明文執筆のまとめ学習として、鑑賞文や批判文を執筆させる。観点（カテゴリー）を設定して説明することや比較しながら説明すること、評価する語彙に対する理解を深めることを目的とする

*同校の資料にある4領域のうち「話すこと・聞くこと」「書くこと」のみ抜粋。他の教科も、領域・学年ごとの指導方針を作成した

今日の ことば

三田川中学校では、教科の授業以外の場面における言語活動も大切にする。「今日のことば」は、教師や生徒の代表が書いた原稿用紙1枚程度のエッセイを毎朝放送で流し、印象に残った言葉や感想を書く活動である。生徒たちは放送を聞きながらメモを取り、それを基に自分なりの考えをまとめて文章を起こす。その作業を毎朝繰り返すことで、学習のペースになる聞く力や書く力、考える力を養うのがねらいだ。

原稿のテーマは教訓的な話や印象に残った出来事など。ちなみに6月某日のテーマは「ありがとうについて」。「生徒の学校評価においても、この取り組みを『誇りに思う』と回答する生徒は多いです。自分たちのためになっているという実感を、生徒たち自身が得ているからではないでしょうか」（古賀教頭）

会科の研究授業の例で見えていく。

この授業では「選挙制度」をテーマに話し合った。過去3回の国政選挙の結果（当選者名、投票数、政党名など）を見て、分かることと分からないことをグループで話し合い、結果をボードに書いて発表する。「復活当選とは何か」「参院選は同月に実施するが、衆院選は違う」など、次々と出てきた気付きや疑問を教師が集約し、選挙区制度、一票の格差問題など、選挙制度の理解につなげる。

「選挙制度について一方的に知識を与えるのではなく、話し合いで考えを深めた後に結論へ導くことによって、生徒の理解はより深まると思います」（古賀教頭）

話し合いは4人1組で行い、それぞれ司会、副司会、書記、発表者の役を担う。分担は座席によって自動的に割り当て、特定の生徒に難しい役回りが集中しないようにしている。

「どの生徒にも平等に機会を与え、皆が力を伸ばせるようにと、役割分担は機械的に決めるルールとしました。消極的な生徒もきちんと役割を果たすようになり、主体的な学習態度が育ちつつあります」（古賀教頭）

これまで授業で行っていた活動でも、言語活動であると意識することで、指導のアプローチや教材の作り方が変わるといえる。例えば、今回、使用した選挙制度について分かったことや疑問点を書くワークシートには「資料AとBを見比べて〜である」ということが分

図4 言語活動実践の記録 3年生数学 単元「三平方の定理」の例（部分抜粋）

◎単元での言語活動のつながり

三平方の定理を理解・活用するために、定理の発見において「予想から一般化」に向かう「証明」の過程を大切にしていきたい。また、三平方の定理が有効に活用されている問題を解くことを通して、図形の性質をきちんと理解しまとめさせていきたい。

◎単元の指導計画と言語活動

学習の流れ	時間	主な学習活動	単元の指導目標を達成するために取り入れる言語活動
三平方の定理	4	○三平方の定理を知る	・「三平方の定理」を発見するために、ピタゴラスが発見したとされる状況を再現することで、疑似体験しながら、 <u>発見までの経緯を予想する</u>
		○三平方の定理を証明する	・いろいろな「三平方の定理」の証明を知り、 <u>証明の過程を理解しながら説明する</u>
		○2辺の長さがわかっている直角三角形の残りの辺の長さを求める	・「三平方の定理」を用いて辺の長さを求めるために、 <u>二次方程式の解法を振り返り、丁寧に計算をおこなう</u>
		○三平方の定理の逆を知る	・「三平方の定理の逆」の意味を理解するために、身近なところを利用して <u>気づく</u> 。また、いろいろな問題解決の糸口になることに <u>気づく</u>
平面図形への利用	2	○正三角形の高さと面積を求める	・正三角形のなかに直角三角形を見出すために、 <u>正三角形の性質を書き出す</u>
		○三角定規の3辺の比を知る	・「60°や45°を持つ直角三角形」の辺の長さに特別な比があることに <u>気づく</u> ために、 <u>辺の長さに注目して三角形を比較する</u>
		○座標平面上の2点間の距離を求める	・関数の問題において、グラフの中に見える「 <u>直角三角形</u> 」と「 <u>三平方の定理</u> 」を関連付け、 <u>2点間の距離を求める</u>
空間図形への利用	3	○直方体の対角線の長さを求める	・図の中に、直角三角形を見出し、手順を考え、求める過程を明確にするために途中の式・考えなどを表現する
		○正四角錐の高さと体積を求める	・空間図形において、「三平方の定理」を用いて、長さ・面積・体積等が求められることを理解するために、 <u>立体の性質について意見を出し合いまとめる</u>
章末問題	2	○基本を活用しながら問題を解く	・考え方を確認するために、 <u>途中の式等をしっかり表現し、問題を解く</u>

実際の記録用紙には、上記の要素の他に、単元名と単元の指導目標が入る。これを用いて、取り入れた言語活動が単元の指導目標の達成に有効だったかを検討した
*同校の資料を基に編集部で作成

かる」という文例が示されていた。

「以前なら、ここまで丁寧に話型を示すことはなかったと思います。言語活動にこだわること、生徒にどのような力を身に付けさせたかが明確になり、より焦点を絞った指導が可能になります」（古賀教頭）

**授業にメリハリをつけて
授業時間の不足をカバー**

言語活動は学力向上や主体性の育成といった成果が見込めるが、一方的な講義形式の授業に比べ時間がかかる点で敬遠されがちだ。

言語活動で授業を捉えなおす

同校でも、言語活動を意識し始めた当初は取り組みに不慣れなこともあり、授業時数が足りないと感じた教師が多かった。しかし、活動に慣れるにつれ、時間不足を補う工夫が出来るようになったと、日吉先生は話す。

「教科書をすべて読ませようと思ったら時間が足りませんが、話し合いの中で教科書を読ませたり、教え込みたい知識はプリントを併用したりと、授業にメリハリをつければ十分カバーできることを皆が実感しています」
教師は言語活動によって学力の定着度が高くなったと感じている。

「知識の習得には反復練習が効果的という考えもありますが、目的が不明確なまま反復練習をしても徒勞と感じるだけです。100回反復して頭に叩き込むよりも、言語活動を通して体験的・帰納的に習得した知識の方が定着はより高いと感じています。遠回りのように見えて、実はこのような指導こそが学力向上の王道ではないでしょうか」(下川校長)

日吉先生も手ごたえを語る。

「言語活動を反映したテスト作りを心掛けていますが、教え込み中心の授業の時よりも定着率は高いという結果が出ています」

生徒の主体性を重視する 言語活動は生徒指導にも有効

同校で教師が一丸となって研究を推進できているのはなぜだろうか。一つには、研究主任の

日吉先生を中心に現場から意識を高めていったことが挙げられる。

「この先10年は学習指導要領が変わらない以上、言語活動に取り組むことは必須です。研究を推進する先生方は、そこを決定事項として強制するのではなく、『子どもたちの学力を伸ばしたいから今まで行っていた言語活動を意識してみよう』と呼び掛け、実行プロセスの一つひとつを先生方と納得し合いながら積み重ねてくれました」(下川校長)

「私たちの時は事例も少なく手探りの状態から始めたので、言語活動とは何かを理解するまでにだいぶ時間がかかりました。今は指導書や行政の資料などが充実していますが、文字だけでは分からないことがたくさんあります。我々教師は、実践してこそ効果や課題を実感できるのだと思います」(日吉先生)

同校がスムーズに言語活動を導入できたもう一つの理由は、かねてから授業で生活指導的な要素を取り入れていたことにもある。同校では生徒の自立を促すために、授業で「自己選択・自己決定をさせる」「自己存在感を生み出す」「共感的理解を育む」という「生徒指導の3要素」に即した場面を出来るだけ設けてきた。生徒指導や集団づくりに少なからぬ効果を上げてきたが、生徒が主体的に動けるよう一人ひとりに役割を与えたり発言の機会を増やしたりする手法は、言語活動と重なるところが多いという。先述した4人1組

で行う話し合いの活動はその一例だ。

「言語活動が学びに向かう集団づくりにも一定の効果を上げることが、今回の校内研究を通して確認できました」(古賀教頭)
今後は、授業力の向上に更に注力する考えだ。11年度中にすべての教師が公開授業を行い、スキルアップを図ると共に、校外の識者に協力してもらい、教科ごとにアドバイスを受けられるような外部の人脈を構築していく。また、現在は英語のみで実施している三田川小学校との連携事業の中に、言語活動を取り入れることも検討中だ。

下川校長が考える言語活動

本校の言語活動は、教科の目標を達成するための手立てとして始まりました。言語活動は日々の授業の延長線上にあるがゆえに、すぐに効果が表れないこともあります。しかし、我々がすべきことは、目先のテストの点数を2点、3点上げることではなく、将来、子どもたちが中学時代を振り返った時、「このような力を身に付けることが出来た」と言えるものを残していくことではないでしょうか。

そのために言語活動の充実は有効な指導であるという確信を持って、今後も先生方の指導力の向上、学校としての支援体制の整備を進めていきたいと思ひます。

年間計画や指導案のひな型を 校長が示し、全教師で練り上げる

東京都府中市立府中第三中学校

府中市立府中第三中学校は、2011年度の校内研修のテーマを「言語活動の充実」と設定し、全教師が各授業に言語活動を主体的に取り入れている。各教科のねらいを達成するための取り組みと、特別活動や日常的な場面での取り組みとを関連させ、効果を高める言語活動を目指している。

生徒の現状

- 感受性が強く、豊かな内面性を持つ
- 自分の考えを自信を持って表現することが苦手

取り組みの基本的な考え方

- これまでも行っていた言語活動を意識し直すことで授業力を更に高め、目指す生徒像に迫る
- 全ての教育活動で言語活動を意識することで、「生きる力」を育む

取り組みの概要

- 研究1年目：基礎知識と実践の方向性を共有
研究2年目：言語活動の具体的な実践イメージを描き、評価の観点のポイントを理解することを目指し、新学習指導要領の完全実施に備える
- 言語活動を取り入れるプロセスを明確にし、各教科の年間指導計画を作成。研究会などで全教師が共有する

取り組みを続けるポイント

- 「言語活動」は新しいキーワードのため、まず校長が基本計画やひな形を作成し、それを基に各教師が改善していく
- 日々の授業観察を通じて、管理職と各教師がこまめに、授業づくりについて丁寧に話し合う

School Data

◎ 1960（昭和35）年開校。東京都の中央部、多摩地域に位置する。市内中学校初の通級指導学級を設置。自然教育にも力を入れている。2007年に中央が吹き抜けの新校舎が完成した。



校長◎谷合しのぶ先生

生徒数◎589人 学級数◎16学級

所在地◎〒183-0027 東京都府中市本町4-16-10

TEL◎042-361-9303

URL◎<http://www.fuchu03c.fuchu-tokyo.ed.jp/>

公開研究会◎未定

「授業」で生徒を、学級を伸ばす

第2回

言語活動で授業を捉えなおす

豊かな内面性を自ら表現できる力を身に付けさせたい

府中市立府中第三中学校は、2011年度の校内研究のテーマを前年度に引き続き「言語活動の充実」と設定した。その背景となる生徒の現状と身に付けさせたい力を、谷合しお校長は次のように話す。

「本校の生徒は感受性が強く、スピーチや運動会の選手宣誓、作文などの『場』を与えると、内面にある豊かな言葉を紡ぎ出すことが出来ます。一方で、日常生活や授業の中で自分の考えを表現したり、自信を持って発言したりすることは苦手です。言語活動を通して、生徒が持っている豊かな内面性を日常的に自ら表現する力を付け、主体的に学ぶ力や人間関係力を高めたいと考えました」

そのために、まず、授業で各教科のねらいを達成するための言語活動を充実させることを中心に捉えた。そして、学校行事や生徒会、学級活動などの特別活動、日常的な場面での言語活動を、各教科での言語活動と意識的・有機的に関連させて効果を高めることを目指している。

漠然と行ってきた言語活動を理論付けして枠組みを作る

谷合校長は、言語活動の手法そのものは既に行っていることであり、全く新しい取り組み

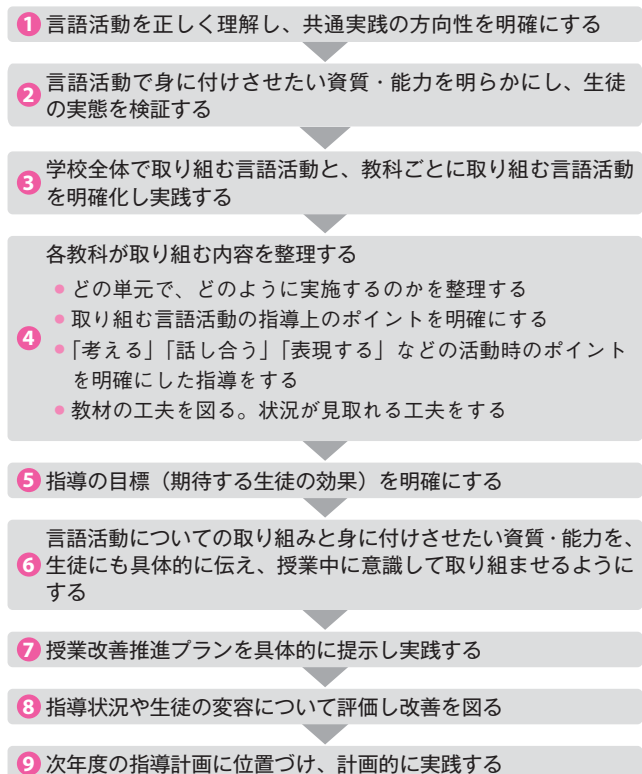
みを始めるわけではないことを校内で繰り返し伝えている。

「各教科にはねらいがあり、それを達成する授業を行うことが大前提となります。重要なのは、今まで漠然としてきたことを『言語活動』として意識し、理論を理解し、枠組みを作り、指導にしっかり位置付けることだと思います」

具体的なプロセスは図1の通りだ。実践に当たり谷合校長は、急に「言語活動の充実」を掲げても、教員の足並みをそろえることは難しいと考えた。そこで10年度の1年間は、教師全員が、言語活動の基礎知識を得て、大まかでよいので実践の型や方法論をイメージできるようにすることを目標とした(図1①)。

「先生方には、頭の片隅で常に言語活動を意識するように伝え続けました。校内研修会には講師を招き、言語活動の効果や、従来の指導をひと工夫するヒントを話してもらいました。そうすることで、生徒の意欲や主体性をどうやって高める

図1 言語活動を充実させた授業づくりのプロセス(研究計画)



*同校の資料を基に編集部で再構成

かを考える際にも、『授業の中に言語活動を取り入れたらどうか』と意識できるようにしていきました」(谷合校長)

教師が週ごとの指導計画を提出する際には、「国語でもグループ討論を取り入れてみれば、生徒はもっと主体的に勉強できるのでは」など、少しずつ授業に言語活動を取り入れるように提案した。



府中市立府中第三中学校校長
谷合しのぶ Tanai Shinobu
「自分の生きがいを持ち、与えられた役割を認識しながら社会に貢献できる人材を育成したい」

日常的な授業観察を通して こまめに改善案を話し合う

谷合校長は、毎日教室に足を運び、授業を見る。

「先生方を尊重しつつ、気になるところがあれば、すぐ先生に伝えていきます。『あの部分は、単に計算させるだけでなく、具体物を使った方が、子どもはもっと主体的に取り組めるのでは?』などの、的確で分かりやすい表現で伝え、良好な人間関係の中でよく話し合うよう心掛けています。また、授業の内容が良ければ、すぐに『良かったですね』と伝えることも大切にしています」

年3回行う授業観察の評価シートには一人ひとりにコメントを入れて渡すなどして、個々の教師とも真剣に関わっている。こうして教師が納得しながら言語活動を意識するようになったことで、生徒の反応が良くなっていった。10年度末、こうした手応えを基に、研究主任が自主的に次年度の研修計画（言語活動）を作成した。

校内の足並みがそろった11年度、校内研修会の1回目に、谷合校長は今年度の研究のねらいと概要をA3用紙1枚に明記し、教師に示した(図2)。当日の様子はP.17〜19参照。これはプロセスの②③④に当たる「生徒の現状」「言語活動の充実を目指すことで高まる

図2 2011年度の研究のねらいと概要



一番下の「成果の検証方法」に書かれている内容は、検証のポイントとして大切なだけではない。「言語活動を取り入れた教育活動を続けると、こんな生徒の変容が見られる」という、同校の目指す生徒像でもある

*上記は加工可能な形でウェブサイトからダウンロードいただけます
<http://benesse.jp/berd/> > 情報誌ライブラリ(中学校向け)

力」身に付けさせたい力と目指す生徒像」「研究の進め方」「教師が取り組むべき内容」「成果の検証方法」を端的にまとめたものだ。

研修会では、教科、学年、単元ごとの言語活動が一目で分かる「言語活動シート」(P.18 図3)のひな型を示した。これを基に各教科で1か月ほどかけて指導計画を記入する予定だ。これはプロセスの③④に当たる。

「言語活動シート」や研究授業で使用する指導案(P.19 図4)のひな型は、谷合校長が作成した。指導案でこだわったのは、「指導と評価の一体化」だ。授業に言語活動を取

り入れるだけでは、手段が目的化するだけだ。教師の指導力向上にはつながらない。指導案には、授業全体に関して、教科ごとの評価の観点に応じた評価規準と方法を記入する欄を設け、指導案の展開の中に評価規準、評価の観点、評価方法を明記する欄を設けた。

校長が率先して枠組み作りを進める理由を、谷合校長はこう話す。

「忙しい中で、ゼロから作り出していくの

校長が示した案を基に 全員で協議

言語活動で授業を捉えなおす

は難しいことです。しかし、大枠やひな型があれば、それを基に自分で工夫しながらより良いものを作ることが出来ます。学校全体で新しい取り組みを始める時は、リーダーが道筋を明確に示すことが大事だと考えています。私の場合、自分の考えを全て文章化し、先生方に配布しています。全ての先生に基本方針をぶれなく伝え、共有することが出来るからです。この考え方が正しいかどうかは分かりません。しかし、まずは私の案をたたき台として、先生方の意見も取り入れながら方向性を定めていければよいと考えています」

プロセスの⑤⑥⑦⑧にある、各教科で取り組む内容や指導内容の明確化などについては、研究主任が中心となり、各教師が研究授業や研究協議会、指導計画案づくりなどを通して、主体的に取り組む。

「校長の仕事は大枠を示すことであり、その後は先生方に任せています。生徒の姿を最もよく知り、各教科のプロであるのは先生方ですから。もちろん、課題があれば一緒に解決法を話し合っただけで済ませず、指導案にも改善を求めます。そこは真剣勝負です」(谷合校長)

各教科の計画と合わせて、行事や生徒会活動など、学年や学校単位での活動も検討する。例えば、校外学習の事前・事後学習でどのような調べ学習や発表会を設けるのかを、言語活動の視点で位置付けていく。

「教科を通して学んだ言語活動を授業以外

の場面で生かし、それを再び教科に返す。その繰り返しこそが本場の『生きる力』を付けるのだと思います」(谷合校長)

11年度後半は、教科書研究に力を入れると共に、新学習指導要領の指導評価規準をじっくり読み込みながら、12月までに12年度の指導計画を完成させる予定だ。

「新学習指導要領の導入に向け、今しなければならぬことは明確です。当たり前のことを当たり前に、確実に取り組み、目指す生徒を育てていきたいと思えます」(谷合校長)

谷合校長が考える言語活動

生徒が授業で学んだ知識を自分の言葉で整理し、相手に分かりやすく伝えられるようになると、自分や他者に対する認知力が向上します。そうすれば、「こう言ったら相手が傷つくだろうから、こんなふうに言ってみよう」と相手を気遣う言葉を発することができ、人間関係力も向上します。人間関係の質が高まれば、学級集団も良くなる。言語活動は、学力を向上させるだけでなく、結果的に質の良いコミュニケーションが出来る集団を生み出せるものだと考えています。先生方にはそうした生徒の変化を実感し、教師としてのやりがいを感じていただけるように支援していきたいと思えます。

2011年度 第1回 校内研修会の様子

研究を始めて1年が過ぎた6月、言語活動を意識的に取り入れるようになってから初めての校内研修会の様子を紹介する。

●研修会の概要

当日は1年生6クラスの全担任が数学、保健体育、理科、英語の授業を同時に公開。他の教師は、あらかじめ示された参観の三つの視点①「学習のねらいに有効な言語活動であったか」などの「言語活動の視点」、②「評価内容は学習状況を見取るのに適切だったか」などの「指導と評価の一体化の視点」、③教材・教具の使い方など「その他の授業改善の視点」に沿って、「効果的だと思う点／自己の教科に活かしたい内容」と「工夫が必要と思う点／質問事項」を付せんに記入する。

当日の放課後に研究協議会を実施。前半50分の分科会では、授業者が簡単な振り返りをした後、参観者(教科混成)が付せんの内容を発表し、議論。最後に指導主事が助言をする。途中、参観者が指摘した教材の工夫について、指導主事が授業者に1対1で具体的なアドバイスをする場面も見られた。

後半30分は、各分科会での議論内容を代表者(主幹教諭)が発表して内容を共有。その後、助言者の指導主事からの講評の後、谷合校長が、「言語活動シート」の趣旨を伝えた。

図3

「言語活動シート」

●「言語活動シート」のひな型

思考力・判断力、表現力等を育てる学習活動		(1) 教科 (2) 特別活動 (3) 学校行事 (4) その他の活動で、取り組む具体的な活動の内容										
1 体験から感じ取ったことを表現する力		1 (1) 計画の作成、学習レポート、課題や読後文、合唱 (2) 各教科科系の取り組み、ボランティア活動 (3) 校外学習、学習旅行、運動会、合唱祭等における感想文 (4) 人権作文										
2 単文を正確に理解し伝達する力		2 (1) 総合的な学習の時間における体験報告 (3) 校外学習等における調査結果報告										
3 概念・法則・図形などを解釈し、説明したり活用したりする力		3 (1) 各教科において既習したことを活用して問題を解いたり、課題を解決したりすることのできる力 (2)(3) 実生活の場面に基いた学習活動										
4 情報を分析・評価し、伝達する力		4 (1) 統計資料等の活用を通して分析活動、その結果を活用する力 (2) 学級・委員会活動等において話し合い活動等による問題解決力										
5 課題について構想を立て実践し、評価・改善する力		5 (1) 課題解決的な学習活動を通して、構想・予測し、実践・実践を通して、その結果から評価・改善する力 (2)(3) 取り組む結果を振り返り、適切に評価し改善する力										
6 互いの考えを伝え合い、自らの考えや疑問の考えを発展させる力		6 (1) 課題解決的な学習活動を通して、自らの考えを伝え合う力 (2) 生徒会活動、学級活動等における学校・学級・学年等の問題解決を回り、向上させるための話し合い活動										
日常的な指導	1 読解力の育成 ○読む、丁寧な読みは活用力の育成 ○題に合った適切な言葉遣いのできる力の育成 ○相手の立場に立った言葉遣いのできる力の育成 2 表現力の育成 ○自分の思いを文章や言葉を使って表現することのできる力の育成 ○手前自信をもって自分の考えを発表することのできる力の育成 3 思考力・判断力 ○主体的に考える力の育成 ○人の意見や考え方を批判して判断する力の育成	○全教育活動の場面に於ける指導(教科・学級活動・行事・部活動) ○各教科・学年・学級・生徒会活動等による報告会・発表の場の設定 ○ディベート等の導入、各教科・学級等による話し合い活動、考える時間や場面等の機動的な設定										
教科名	各教科の言語活動指導のポイント	単元ごとの言語活動指導計画										
		4月	5月	6月	7月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
国語	話すこと、書くこと、聞くこと、読めること、そのそれぞれに、読解、要約、読後、読後、読後などを重視する。											
英語	指導する単元の総数を1200語程度とする。発音と綴りを指導した指導を実施する。文法の指導は、言語活動と関連させた指導を実施する。日本語との違いに留意した指導を実施する。											
社会	社会的現象の総称、概念を解釈する学習や事象が特色や事象物の知識を説明する学習などを重視する。											

* 図は一部抜粋。資料の全体は加工可能な形でウェブサイトからダウンロードできます <http://benesse.jp/berd/> > 情報誌ライブラリ (中学校向け)

●「言語活動シート」の活用ステップ

ステップ 1 教科単位で作成…各学年、各単元でどのような言語活動を取り入れるのかを意図的・計画的に進めるための土台とする。各教科会で、今回の研修から1か月ほどかけて作成する。

ステップ 2 全教科でまとめる…各教科分をまとめ、一覧できるシートにする。ここまでが11年度の作業目標だ。次年度以降、「総合的な学習の時間」や学級活動などあらゆる教育活動でも活用できるようにする。

参観者 計算練習で、マイナスのマイナスはプラスになるなどは、今日のような理屈を教えるよりは感覚的に覚えさせる方が良いのでは？

司会 いや、今回は4観点のうち表現・処理を重視したものではないので、答えを出すための別の授業のパ



●分科会の様子(数学分科会での内容を部分抜粋)

主幹教諭が司会進行役となり、参観の三つの視点のうち「言語活動の視点」に絞って協議した。

参観者 3人でのグループ学習について。基本の四則計算が出来ない子どもが一定数いたので、3人全員の理解度が低い場合は時間の無駄ではないか。理解できないまま進んでしまう懸念があり、今の段階でどうにかしないといけない。

授業者 確かに、一部の子どもは混乱していて、期末テストに向けて補習の必要を感じている。

参観者 もう一つ気付いた点は、教師とのコミュニケーションだ。授業者が、問題を各自で解かせた後に分かった子に挙手させた場面があったが、あそこではほとんどの手が挙がるまでじっと待っていた。コミュニケーションの一つの形であり、良いと思った。講義形式の授業と比べて全ての理解度の子が意欲的に学び、力が付くと思う。

司会 発表の仕方は課題。特に、数学ならではの、「理論や根拠に基づいた説明の仕方」

ターンがあるのでは。今回は「見つける」という導入の部分が鍵だったのでそれを議論したい。

参観者 4つの数を使って合計を10にするゲームは、楽しみながら四則計算のきまりを習得できる良い方法だと思った。授業の最後にあえて間違っている子に解き方を説明させ、間違えた点を全員で共有した点については、時間はかかるが、個の間違いを正すのではなく全員を正す良い指導だと感じた。

参観者 楽しく活動していたが、それだけではいけない。単に話し合いをさせるよりも、理解の進んでいる子が分からない子に教えてあげるようにする形態の方が良かったのではないか。

参観者 子どもたち自身が、自分の考えを話したり、分からないから聞いたり、それに対して答えたりする学習形態に慣れていない。これがスムーズに出来る力を付けさせたい。もう一つ気付いた点は、教師とのコミュニケーションだ。授業者が、問題を各自で解かせた後に分かった子に挙手させた場面があったが、あそこではほとんどの手が挙がるまでじっと待っていた。コミュニケーションの一つの形であり、良いと思った。講義形式の授業と比べて全ての理解度の子が意欲的に学び、力が付くと思う。

「授業」で生徒を、学級を伸ばす

第2回

言語活動で授業を捉えなおす

図4 校内研修会用「指導案(数学)」

授業は目標に始まり、目標に終わります

教科に応じて、また単元に応じて、どのような言語活動を実施するのかを記載します。今後、年間を通して、言語活動についての、どのような内容・方法を指導するのかを検討する必要があります

単元の指導計画の指導と評価の一体化に基づき、評価の観点に応じた評価規準と方法を記入してください

⑥に示された指導目標を達成させる内容を示すこと。⑧に示された言語活動が必ず示されていること。⑨の授業改善の工夫が示されていること。⑩評価規準を見取ることのできる指導内容・方法になっていること

分科会で議論された授業の指導案(3人のうちの1つ)。吹き出しは、指導案のひな形を示した際に、谷合校長が添えた作成のポイント

平成23年度 府中第三中学校 校内研修用指導案「言語活動の視点を取り入れた学習指導」			
①実施日	6月16日(木)	②授業者・学級	千葉 光 1年A組
③教科名	数学	④単元名(題材名)	正の数・負の数
⑤単元目標	数の範囲を拡張して計算の可能性を広げ数についての処理がいっそう手際よくできるようにする。		
⑥本時の指導目標	四則混合計算のきまりを理解することができる。		
⑦単元における言語活動の視点	加法・減法・乗法・除法や、その混合計算の方法を説明する。		
⑧本時の授業改善の視点	計算のきまりにしたがって、四則混合計算の仕方を説明する。		
⑨本時の授業改善の工夫	教員等を利用し、生徒の発言・活動の時間を増やす。生徒主体の授業をより進める。		
⑩本時の評価規準と評価方法(指導と評価の一体化)	○知識・理解：四則の混じった式や括弧のある式において、括弧や乗除の優先のきまりについて理解する。		
⑪本時の指導計画	⑫言語活動	⑬授業改善の視点(工夫点)	評価規準・方法
導入(5分)	○挨拶・出席確認・服装指導 ○本時の指導目標の提示 ○本時の学習内容の提示		
展開(40分)	小学校で学習した四則計算のきまりの確認 ① 乗除優先のきまり ② 括弧優先のきまり 課題「一連の計算式から間違いを探す(全7問)(ワークシート1)」 ■大きなカードを用いて、板書時間を少なくする。 ○3人グループ(計6班)で話し合わせる。また、問題ごとに黒板にまとめる人と全員の前で発表させる人を決める。		○《知識・理解》四則の混じった式や括弧のある式において、括弧や乗除の優先のきまりについて理解する 評価方法：発言内容ワークシート
まとめ(5分)	○本時の学習内容の振り返り ○課題、学習評価等の提示 ○次回の授業の予告		
⑭板書計画・教材・補助資料(ワークシート等)の活用			

共通の授業の視点です

共通の授業の視点です

⑩に示した評価規準がここに示されます。
・評価の規準
・評価の観点
・評価方法
の3点を必ず明記してください。
評価規準と指導内容が一致していること

⑨の授業改善の視点・工夫点について詳しく記載します

上記のシートは、Benesse教育研究開発センターのウェブサイトから加工可能な形式でダウンロードできます。
<http://benesse.jp/berd/> >情報誌ライブラリ(中学校向け)

について、授業を積み重ねながら育てていく必要性を感じた。授業時数と指導内容とのバランスがあるし、今回みたいなことは毎回出来ない。こうしたことを踏まえた年間カリキュラムを作っていけばよい。

指導助言者 今日の授業は、表現をする場面を意識的に作り、子どもたちが意欲的に取

り組んでいた点が良かった。こうした授業を1年生で行っていることが重要で、今後も続けると、3年生になれば、必ず上手に表現できるようになる。数学では、数学の力を深化させることと、全体で共有することのために言語活動を行っている。数学科の目標に「数学的活動を通して」とあるが、ここを押さえ

ることが重要だ。また、子どもの言語活動を周囲が支えることも大切になる。例えば、子どもが発表する時に、先生が「静かにさせる」「注目させる」ことによって、気持ちよく発表させることなどがそれに当たる。ここが出来ていたので、伸びしろがあると感じた。課題は、「考える」と「発表する」の両方を50分に押し込んだために、時間が足りなかった点。また、課題の難易度が高かったため、もっと簡単にした方が、子どもは考えを巡らせることが出来たのではないか。言語活動は日々の姿勢が大事。話し掛ける子どもの方を向いて話すなど、先生自身の積み重ねで子どもも変わる。3年後の姿を期待して、頑張っていたきたい。

● **研修会を終えて、授業者の感想**

・言語活動を意識した授業とはどんなものかを実感し、今までの授業を振り返る良い機会になりました。特に分科会での議論が、教科や経験年数に関係なく発言し合えたので、最も勉強になりました(数学・延本先生)

・分科会で、グループ学習の仕方や人数割などについて、他教科の先生からたくさんアドバイスをもらって参考になりました。これから始まる習熟度別の授業で生かしたいです(数学・千葉先生)

「待つ」「追い込む」「つなぐ」授業で 生徒にとことん考えさせる

高知県 四万十町立窪川中学校

四万十町立窪川中学校は、5年前から言語活動を意識したグループ活動を軸に授業を展開し、生徒同士の学び合いを大切にしてきた。その結果、生徒の自己肯定感が高まり、互いを認め、雰囲気生まれ、学校全体が落ち着いてきた。更に学力の向上にも成果が表れてきている。

生徒の現状

- 以前は荒れていたが、「学び合い」の導入により、生徒は落ち着きを取り戻している
- 勉強が苦手な生徒や意見を十分に出せない生徒が、まだ「学び合い」に参加しきれていない

取り組みの基本的な考え方

- 「学び合い」を通して、温かい学級集団をつくる
- 1人では解決できないような難易度の高い課題を与え、「学び合い」を行うことで生徒一人ひとりが課題に向き合い、思考力を高める機会をつくる

取り組みの概要

- 授業を2段階で構成。前半は「個人作業の共同化」による基本事項の習得。後半は「背伸びとジャンプ」による質の高い学びを目指す
- 「待つ」「追い込む」「つなぐ」など、生徒のつばきや意見を大切に、それらをつないだ柔軟な授業展開を行う

取り組みを続けるポイント

- 毎年4月に職員全員で「協同的な学び」の理論を基礎から学習しなおし、目指す指導法を確認、見直す機会をつくっている
- 「学び合い」を共通言語に、発問の仕方や発言のつなぎ方によって、生徒が深く考えていたかを教科を超えて議論し合う授業研究の場をつくる

School Data

◎1974（昭和49）年に6つの中学校が統合して開校。2008～10年度は県の「学力向上のための重点支援事業」、09年度には県の「目指せ！教育先進校応援事業」の指定を受ける。



校長◎勝間 慎先生

生徒数◎336人 学級数◎13学級（うち特別支援学級3）

所在地◎〒786-0011 高知県高岡郡四万十町香月が丘 8-18

TEL◎0880-22-0020

URL◎<http://www.kochinet.ed.jp/kubokawa-j/>

公開研究会◎2011年10月5日（水）

「授業」で生徒を、学級を伸ばす

第2回

言語活動で授業を捉えなおす

グループ学習によって 学校の落ち着きを取り戻す

6年前、四万十町立窪川中学校は荒れの真ただ中であつた。チャイムで行動できない生徒や授業に出ない生徒がいて、落ち着いて授業が行える環境とは言い難かつた。そうした状況を打破するため、2007年度の校内研究テーマを「活動的で、協同的で、表現的な授業づくり」とし、グループ学習を中心とした学び合いの一形態である「協同的な学び」(*)を参考にしながら授業改善に取り組み始めた。教頭の下谷達也先生は、当時を次のように振り返る。

『『どうにかして学校を変えたい』という強い思いが根底にありました。そのためには授業を変えることが必要と考え、研究主任が先進校に視察に行き、私たちが本を読み、教師が生徒役になる模擬授業を行って自分たちで体験しながら、手探りの状態で始めました』

当時3学年担任で、現在は研究主任の本山真美先生は、授業のたびにグループ学習を行うことによって、次第に生徒自らが、その良さに気付き始めたと話す。

「自分一人では分からないことでも、4人で話しながら考えれば答えを見つけれられることに、生徒は気付いたようです。ある時、少し難しい課題を出したところ、生徒から『グループで考えていいですか』という声が上が

りました。私自身はそれをグループ学習の課題にしていなかったのですが、生徒は自分たちで話し合いを始めたのです」

授業にきちんと参加しない生徒がいると、話し合いをしながら進めるグループ学習は成立しにくいと思われやすい。しかし、本山先生は、そうした状況だからこそ、少人数で行うグループ学習が生徒を授業に戻す有効な手段になると強調する。

「当初、『生徒は荒れている生徒がいるから授業が進まないと思っている』と考えていました。しかし実際には、生徒は『授業がきちんと進まないのは先生がしっかりしないから』だと思っています。グループ学習にしても、授業を妨げるような行動をしていたクラスメートを仲間外れにするようなことは決してせず、生徒たちは自然に受け入れていました」

また、下谷教頭は、授業にあまり出ていなかった生徒にとっても、4人でのグループ学習は参加しやすい要素があると話す。

「人数が少ないので、黙っていても『どう思う?』と尋ねられ、分かるうが分かるまいが発言しなければなりません。意見を言えば、他の生徒はきちんと聞いてくれるので、自分も他人の意見を聞くようになる。そうした言語活動の積み重ねによって、生徒は教室に自分の居場所があると感じるようになっていったようです。授業に参加しない生徒はほとんどいなくなりました」



四万十町立窪川中学校校長
勝間 慎 Katsuma Shin
「教師全員で同じ方向を向いて指導に当たるために、先生たちを支援していきたい」



四万十町立窪川中学校教頭
下谷達也 Shimotani Tatsuya
「地域から信頼される学校を目指し、信頼される人間を育てたい」



四万十町立窪川中学校
本山真美 Motoyama Sami
研究主任、国語科担当。「生きている力に付けて、中学校を卒業させたい」

学力調査の活用問題の 正答率が大きく伸びる

「生徒同士が話し合うグループ学習」を授業に取り入れてから、教室の雰囲気は大きく変わった。それと共に、教師の意識と指導法も変わっていった。協同的な学びを核にした授業改善の校内研究を重ね、09年度には高知県の「目指せ！教育先進校応援事業」の指定を受けたことで研究にも弾みがついた。同年に赴任した勝間慎校長は、先進校への視察が教師の目標意識を高める契機になったと話す。

「先進校の視察では指導法を学ぶだけでなく、その学校や生徒の柔らかく落ち着いた雰囲気が大いに刺激を受けました。目指したい学校像、生徒像を実際に見て、肌で感じるこ

* 生徒同士を関わらせ、互いの意思をつないでいく手法。同校では東京大大学院の佐藤学教授が提唱する方法を取り入れている

とで、協同的な学びを進めている自分たちの方向性は間違っていない、このまま推進していこうという意識を持ってました」

取り組みの成果は、生徒と学校の落ち着きを取り戻すだけにとどまらず、生徒の学力向上にも表れ始めた。文部科学省「全国学力・学習状況調査」の結果を見ると、取り組みを始めた2年後の09年度調査で、国語のA・B問題、数学のB問題の正答率が全国平均を初めて上回った。勝間校長は、この変化を次のように評価する。

「特に、国語も数学もB問題の正答率が大きく伸びたのは、グループ学習でとことん考えさせている結果だと分析しています。グループ学習によって授業にしっかりと取り組ませる。これが学びの保障に結び付いていることを証明でき、教師の自信になりました。ただ、学習への苦手意識が特に強い生徒や自分の意見を十分に出せない生徒も多くいます。こうした生徒を学び合いに参加させ、更なる学力向上を図ることが課題です」

生徒の発言を丁寧につなげ 思考を促す

窪川中学校では、授業で生徒に考えさせるために「待つ」「追い込む」「つなぐ」の三つの指導を大切にしている。

『待つ』のねらいは、生徒一人ひとりが内省する時間をつくり、考えを深めさせること

にあります。生徒が発言に困っていると、教師は何らかの助言をしたくなるものです。しかし、あえて生徒に『沈黙』を与えて、自分の頭で整理するまで待ち、深く考えるように促しています。教師が粘り強く『待つ』ことで、生徒同士の助け合いが生まれます。生徒を信じて待つことが大切です（本山先生）

「追い込む」には、生徒の発言に対して「なぜ」と迫り、その発言や考え方に至った理由や過程を、生徒自身に深く考えさせたいというねらいがある。生徒にただ発言させて終わるのではなく、その発言に対して教師が「聞いかけ」を重ねることで、生徒をより高く、本質的な課題に導いていけるといえる。ただし、生徒を「追い込む」課題や発問を投げかけることは容易ではない。

「教師がどれだけ教材研究をしているかが一番のポイントとなります。設定する課題に迷った時は、同じ教科の先生に相談しています」（本山先生）

「つなぐ」には、一人の生徒の発言やつぶやきを、学級全体で取り上げ、問い返し、生徒一人ひとりに考えさせるといふねらいがある。教師の言葉だけでなく、生徒の疑問や発問を丁寧に拾い、つなげていくことで、生徒の理解を促したり、思考をより深めたりすることが出来るという。

「一人の生徒を当てて答えさせるだけでは、学びはそこで止まってしまい、せつかくのグ

ループ学習の良さを生かすことが出来ません。生徒の発言を受け止め、学級全体に広げていく。それが教師の指導力が問われる場面でもあります」（下谷教頭）

一人では解けない課題で 生徒に考えさせる

更に、同校ではグループ学習を活性化させるために次のような工夫をしている。

①2段階の課題を提示

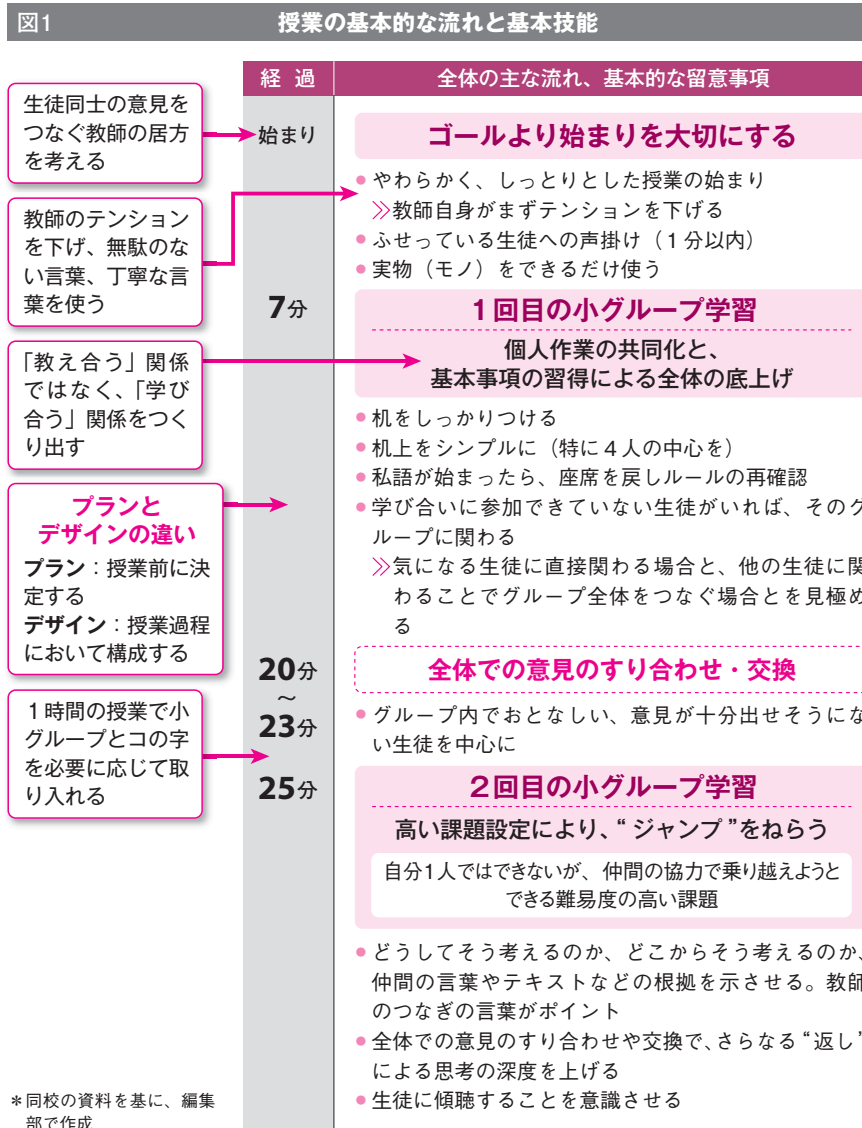
授業の基本的な流れを示したものが図1である。

1回目のグループ学習は、ワークシートの問題を解くなど、本来なら一人で取り組む作業を、4人で机を向かい合わせに行う。基本的には個人作業だが、互いに話しやすい状況にし、分からない生徒は友だちに説明してもらうことで理解を深め、分かる生徒は友だちに説明することで理解の定着を図る、というねらいがある。

2回目のグループ学習は、「ジャンプ課題」として、学力上位層の生徒でも一人では解決できない課題を提示し、グループで考えて答えを見付ける活動を行う。

『ジャンプ課題』では、生徒が相当難しいと感じる課題を出すこともあります。生徒の反応を見て難易度が高すぎると感じたならヒントを出しますが、難易度が低すぎると答えがすぐ出てしまい、話し合いになりません。学

言語活動で授業を捉えなおす



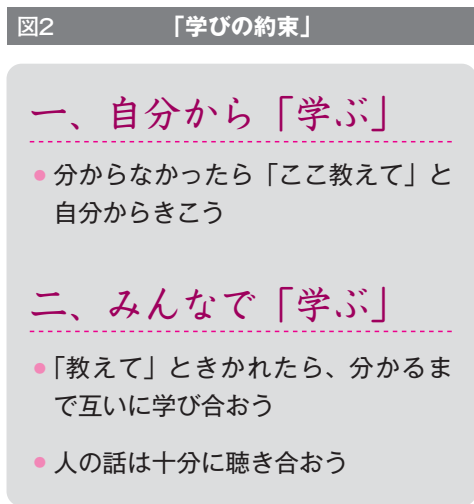
力下位層の生徒は答えを出せなくても、話し合いの過程で答えに結び付くことは言える」と、達成感や自己肯定感を得ることが出来る」（本山先生）

グループ学習中、教師はグループを回りながら生徒の発言を聞き取り、その後の全体学習でその意見を伝えて学習を深めていく。どのような発言があっても授業を進められるよう、生徒の発言を想定しておくことも重要だ。

②「学びの約束」を掲示し、意識させる

「学びの約束」(図2)を黒板の上に掲示し、生徒に意識させている。

「大勢の前だと発言しづらい生徒でも、隣の生徒には自分の意見を言うことが出来ます。グループ学習では意見交換が大切であることを強調し、他人の意見でも自分の考えとすり合わせて、自分の意見としても良いと伝えていきます」



こうした姿勢が浸透した結果、学力上位層の生徒が下位層の生徒に教える姿がよく見られるようになったという。

「学力の高い生徒は、他人に分かるように教える過程で、だんだんと教え方を工夫するようになります。これもグループ活動における言語活動の一つといえます。教師にとつては、分からない生徒を教えてくれることによつて、効率的に授業が進められるという利点もあります」（本山先生）

③座席は男女の市松模様とする

学級の座席はコの字型を基本とし、男女が市松模様になるように配列（P.24写真）。4人のグループ学習で机を寄せ合った時に、男女がクロスになるようにしている。

取り組みを始めた当初は、話し合いが活発になるように、教師が生徒同士の人間関係を



写真 2年生の国語の授業の様子。座席はいつもコの字型で、グループ学習の時は4人ずつで机を合わせる。生徒のかばんは全てロッカーに置き、机を合わせやすいようにしている

考慮して座席を決めていた。現在は、どんな座席であっても、話し合いはスムーズに進むようになった。

ベテランが先頭に立ち 教師も学び合う集団に

こうした取り組みを支えるのは、校内研究だ。毎年4月になると、教師全員で協同的な学習の理論を基礎から学習するようにしている。他校から赴任した教師の大半は協同的な学びの経験がないため、同校の指導法をつかむ機会として位置付ける。以前から在籍している教師にとっては、基本を学び直し、今までの指導を見直す機会と位置付けている。

研究授業は年6回以上行い、当日のうちに事後研究会を開いて生徒の様子を中心に話し合う。教科内容に関する気づきや助言すべき点があれば、研究会とは別に直接、授業者に伝えるようにしている。

「教師の発問の仕方や、生徒の発言の拾い方、間の取り方など、教師と生徒のやり取りや生徒同士の様子などを見取り、意見を出し合っています。教科の枠を超えて、活発な話し合いになっています」（下谷教頭）

勝間校長は、それを「教師同士の学び合い」として評価する。

「職員室でも、先生たちが授業での生徒の様子を伝え合い、課題設定について意見交換をしている姿が見られます。ベテラン教師ほど自分の指導スタイルを変えにくいものですが、本校では50代の教師が先頭に立って研究に取り組み、指導をよりよくしようとしています。学び合いを教師自らが体験してこそ、授業でも実践できるのではないのでしょうか」

研究授業は、教育委員会や町内の小・中学校にも案内を送り、なるべく多くの人たちに見てもらおうようにしている。これは生徒指導にも大きな成果を見せている。

「教室が汚くても平気だった生徒たちが、研究授業の前に自ら掃除をするようになり、だらしなかつた服装をきちんと整えるようになりました。少し早く来校された先生方がその姿を見て褒めてくださいました。生徒たち

が変わる、大きな契機となりました」

協同的な学びは5年目を迎え、学校の雰囲気の変化や学力向上という成果を得た。勝間校長は今後の課題を次のように話す。

「11年度はピンチであり、チャンスでもある年だと捉えています。学校は落ち着いて来ましたが、研究開始当初からいた教師の数人が異動しました。この1年を教師全員でしっかりまとまって取り組み、今後10年は落ち着いた学校でいられると思います。油断をしたら昔に戻るといふ危機感を持ち、生徒に丁寧に関わって指導していきたいと思えます」

勝間校長が考える言語活動

本校では、グループ学習の一環として言語活動を行っています。グループ学習では、意見を聞く機会と発言する機会が一人ひとりに必ずあります。だからこそ、生徒は誰の発言に対しても聞く姿勢が持て、自分の考えを遠慮なく発言できるようになったのだと思います。勉強が苦手な生徒や気が弱い生徒も、友だちに認められる場を自然とつくることができます。この繰り返しによって、生徒の間に他者を認める気持ちが生まれ、弱い者いじめが少なくなってきました。言語活動は、最終的には生徒一人ひとりに学力を付けることが目的ですが、学校の雰囲気づくりにも大いに貢献しています。

言語活動で授業を捉えなおす

図3 授業研究会の例 2年生国語

授業テーマ 聴くこととつなぐこと
学習内容 類義語、対義語
ねらい ①類義語の使い分けと対義語の意味や役割について理解する
 ②類義語や対義語の存在理由を考える
 ①は全員につけたい力、②はジャンプによってつけたい力

◎授業の流れ T: 教師 S: 生徒

■導入

類義語、対義語という言葉について確認する

T 「今日の学習テーマは、類義語と対義語です。教科書を開いて黙読しましょう」

生徒たちは黙読する

T 「では、類義語の『類』にはどんな意味があると思いますか。分からなければ、隣の人と話してみてください」

生徒は隣同士で話し始め、教室がざわつく

S 複数 「種類の類」「類似」などの言葉が挙がる

T 「なるほど、似ているという意味がありそうですね。では、対義語の『対』にはどんな意味がありますか」

S 複数 「反対」「対」という言葉が挙がる

T 「では、両方にある『義』にはどんな意味があるのでしょうか」隣同士の話し合いを促すものの、生徒の手が挙がらないので教科書の黙読を促す。再度、生徒に発問を投げ掛ける

■グループ活動

机をコの字型から4人で机を寄せ合う形にし、4人グループで音読とワークシートに取り組む

T 「類義語は意味が似ている言葉、対義語は意味が反対の言葉ですね。では、グループで音読して、ワークシートに取り組みましょう」

生徒は一斉に教科書の音読を始める。続いて、ワークシートに取り組む。初めは個人で取り組んでいるが、次第にあちこちで話し合いが起る。グループで話しても分からない場合、教師を呼んで質問する

■全体活動

◆ワークシートの課題1の答え合わせと話し合い

机をコの字型に戻し、課題1の答えを、生徒が発表

T 「磨いてと拭いては、どう違うと思いますか。言葉を入れ替えても大丈夫と思いますか」

少し間があったあと、一人の生徒が挙手

S 「磨くは表面をつややかにする、拭くは表面に付いているものを取り除く、という意味の違いがあるから、入れ替えたら不自然になると思います」

◆ワークシートの課題2の答え合わせと話し合い

課題2の答えを、生徒が発表

T 「どうして、その言葉が入ったのでしょうか」

S 「良いだから悪い、行きだから帰りました」

T 「文全体が対比的な表現だからですね」

◆ワークシートの課題3（ジャンプ課題）を投げ掛ける

T 「あす、あした、みょうにちは類義語ですが、どういう意味の違いがあるかグループで話し合いましたか」

いがあるかグループで話し合いましたか」

S 「……」生徒の反応が悪く、発言がない

T 「どんな場面で使い分けるか、考えてみてください」

生徒の何か言いたそうな表情を見て、教師はその生徒に発言を促す

S 「あすとみょうにちは改まった言い方で、あしたはどんな場面でも使います」

T 「ほかに意見はありますか」

S 「みょうにちは尊敬語みたいに使う」

T 「この三つを漢字で表すと、そうだね、『明日』と一つになるね。でも、なんで三つの言い方があるのだろう」



グループ学習の様子

■まとめ

類義語と対義語がある意義を説明する

T 「英語だと tomorrow と一つしかないのに、なぜ日本語では三つも言い方があるのか。次までの課題とします」

◎事後研究会での発言

授業者

「あす、あした、みょうにちの違いの説明をジャンプ課題としましたが、言葉の意味や使い分けを説明するのは難しかったようです。しかし、それが国語の目指すところでもあるので、生徒から説明が出てくるのを待ちました」

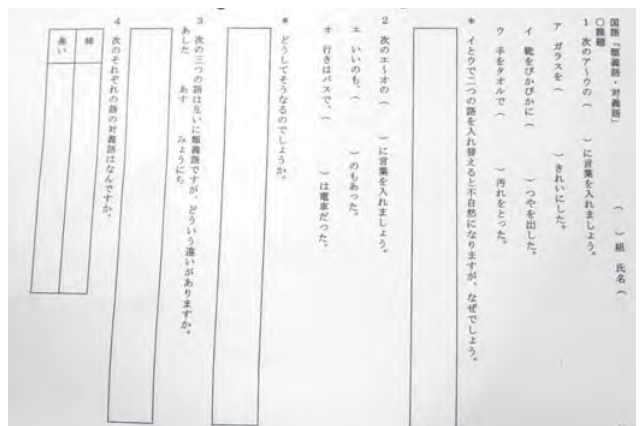
その他の教師の発言

「課題1、2は生徒にとって簡単だったようです。例題は複数あってもよかったのではないかと思います」

「全体活動で、答えが出てこない場合、例文を提示しても良かったのではないかと。生徒が考えるきっかけになると思います」

「あす、あした、みょうにちの違いで、活動が止まっていたので、もう一度グループ活動を入れても良かったのでは？ グループにすればつづきも増えます」

「生徒からの発言が少ない場面でも、先生は生徒から発言があるまでよく待ったと思います。私なら答えを言ってしまっていました」



本時で使用したワークシート

3校の事例から学ぶ言語活動実践のポイント

P.8〜25で紹介した3校の実践事例を参考に、言語活動を進める際の計画・実践のポイントを、東京女子体育大の田中洋一教授に解説していただいた。

1 知識の共有と管理職のリーダーシップで「ぶれない軸」をつくる

事例のどの学校も、生徒の実態を基に校内研究に取り組み、理論と実践の両面を大切にしている点が印象的でした。

言語活動は教科や教師によって関心や理解の度合いの差が大きいため、まずは「言語活動とは何か」という基礎知識の共有をお勧めします。共通理解のないままにいくら研修を積んでも成果は見込めません。吉野ヶ里町立三田川中学校（P.8）は、取り組みを始め

るに当たり、言語活動に詳しい識者の話を聞き、自分たちで文献を読み、言語活動とは何かという本質に迫ろうとしました。言語活動の質を高め学力向上につながるためにも、言語活動の目的はどこにあるのか、どのように自分の学校、教科で実践していくべきか、といったことを理解しておくことが大切です。

教師の共通理解を深める上で、管理職の役割も重要です。各教科・学級の先生に役割や

権限を与える前提として、趣旨を徹底する場面で管理職がリーダーシップを発揮することが必要です。事例の各校では、校長や教頭がけん引役となって言語活動の趣旨を徹底し、計画立案にも深く関わっていました。教師集団がまとまるには、常によれずに基本路線を提示してくれる存在が必要です。管理職の先生方には、率先してその役割を担っていただきたいと思えます。

2 指導計画を教師全員で共有し、教科・学年を超えた土台とする

教科のねらいはそれぞれ違っても、「言語活動で生徒に『生きる力』を付ける」という最終目標は同じ、ということを教科間で共有することが大切です。

府中市立府中第三中学校（P.14）では、全教科の言語活動の指導計画を立て、学校全体

で共有しようとしています。指導計画の立案

は、学校全体の共通理解を図り、足並みをそろえる上で何よりも重要な鍵を握ります。教科間の連携を踏まえた計画が立てられれば理想ですが、まずは担当教科以外の教科でどのような言語活動をしているのかを知るように

しましょう。

教師の思いつきや教科の都合だけで言語活動を進めるのではなく、教科間の連携や学年ごとの積み重ねを意識することが大切であり、指導計画の立案と共有はその第一歩となります。

言語活動で授業を捉えなおす

3

研究授業では「子どもたちの思考の深まり」を評価する

研究授業で大切なのは、担当教科に関係なく全教師で話し合える共通の観点を示すことです。「自分は国語科だから社会科のことは分からない」となると、言語活動で有意義な研究を進めることは難しくなります。四万十町立窪川中学校（P.20）は校内研究を頻繁に行い、教科を超えた意見交換を活発に行っています。

言語活動の研究では、その活動によって生徒は考えを深められたか、自分の考えが持てたかという視点が有効です。府中第三中学校が指導案に「本時における言語活動の視点」を盛り込んでいるのは、言語活動における研修の核心を突いています。

授業者は、今回の授業でどこに言語活動を入れるのか、どんな力が付くと想定するのか

を指導案に明示する。参観者は、生徒の考えが深まったかどうかを評価する。この方法なら、教科が異なっても意思疎通が図れるはずだ。「本時の活動で生徒の考えは深まったのか」「深まっていないなら発問にもう一つ条件を増やしてはどうか」「生徒が考えやすくなるように資料をもう一つ用意したらどうか」など、有意義な話し合いになるでしょう。

4

学び合いを取り入れる際は生徒に応分の役割を持たせる

窪川中学校ではグループ活動による学び合いを言語活動の中心に据えています。グループで考えを出し合うことで、思考力を高めるというのはまさしく言語活動であり、考えを深める有効な手立ての一つです。

取り入れる際には、どの学力層の生徒もそ

れぞれ力を伸ばせるような工夫が必要です。生徒が応分の働きを果たし、生徒の役割が固定しないよう配慮しましょう。三田川中学校のように、座席の場所などで役割を自動的に決め、機会を平等に与える方法も有効です。

忘れてはならないのは、言語活動における

学び合いは手段であり、生徒の考えを深めるためにあるということです。「発表の仕方が良かったか」「記録はこのように取らせた方が良い」といった手法論に偏ることなく、子どもの思考を深めるような指導を模索していただきたいと思います。

5

言語活動に慣れ親しむ場を教科学習以外で設定する

今後は、教科学習以外にも言語活動を意識して行う必要があるでしょう。三田川中学校の「今日のことば」のように、日常的に言語活動を展開することは意義があります。

新学習指導要領では、特別活動など授業以外のさまざまな場面でも言語活動の充実を促

しています。特別活動の言語活動も教科学習と同様に、活動目標を達成する手段であることに変わりはありませんが、教科学習よりもっと自由に言語活動そのものを体験させてもよいと思います。学活でクラスメートの話を聞いたり、まとまった文章を読んで感想を

書いたりするのは、言語活動に慣れ親しむ上で有効ですし、物事をじっくり考える習慣を付けるためにも有意義な活動になります。

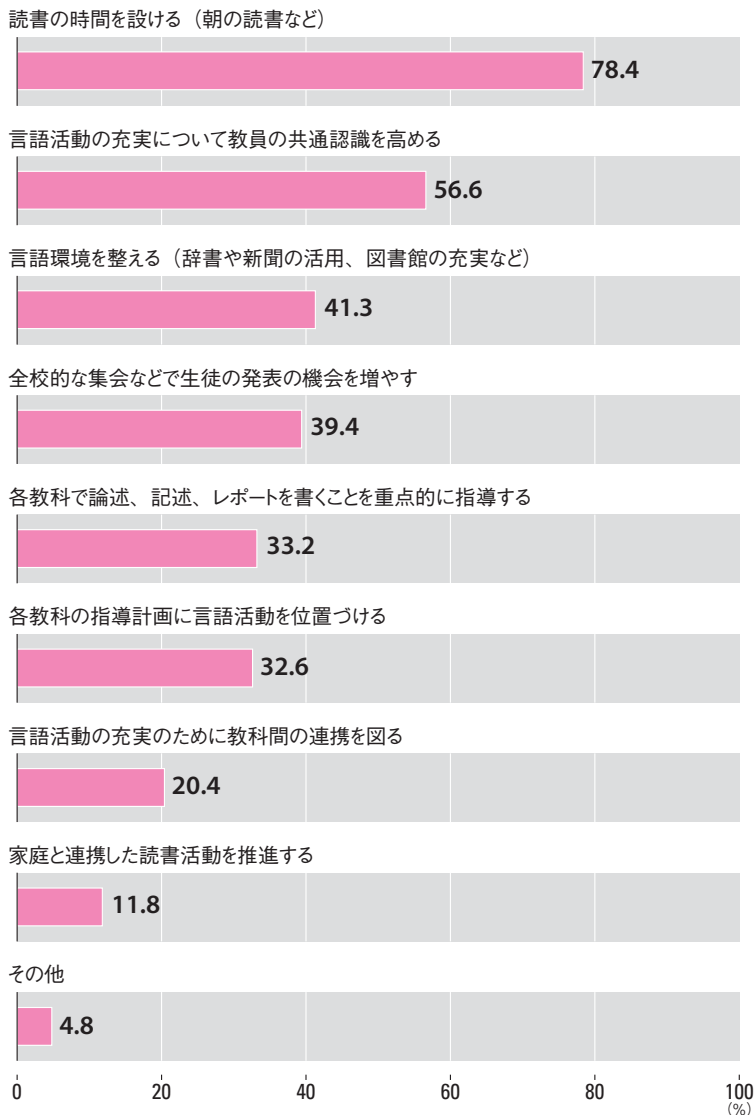
授業との相乗効果を高めるためにも、学校生活のさまざまな場面で言語環境を整えることは、今後ますます重要になるはずです。

データでみる！ 中学校における 指導力向上の取り組みと生徒の実態

言語活動の充実や授業改善のために、中学校ではどのような取り組みを行っているのだろうか。授業に対する生徒の意識や態度はどのようなものか。データから実態を把握し、課題を考える。

1 「言語活動の充実について教員の 共通認識を高める」学校は約6割

Q. 今年度(2010年度)、言語活動の充実のために
全校的な取り組みとして行うことがありますか
(回答：中学校主幹教諭・教務主任／複数回答)



注) サンプル数は3,366人
出典／ Benesse 教育研究開発センター「中学校の学習指導に関する実態調査報告書」(2010年)
<http://benesse.jp/berd/> >「調査・研究データ」>「学校・教員の実態や意識について」

言語活動の充実のために学校全体で「教員の共通認識を高める」取り組みを行っているのは、56.6%。「各教科の指導計画に言語活動を位置づける」は32.6%、「言語活動の充実のために教科間の連携を図る」は20.4%にとどまる。

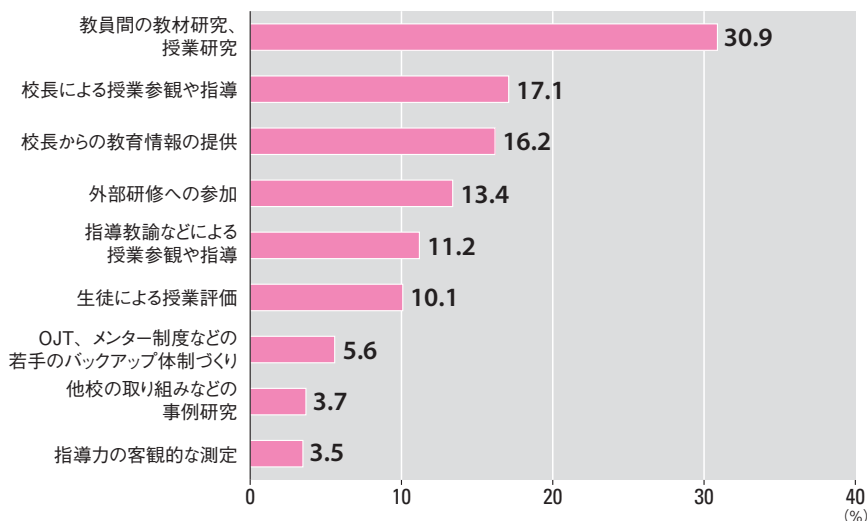
「授業」で生徒を、学級を伸ばす

第2回

言語活動で授業を捉えなおす

2 3割の校長が「教員間の教材研究、授業研究」に力を入れている

Q. 貴校では、教員の指導力を向上させるために、次のことにどれくらい力を入れていますか(回答：中学校校長)



注1) 数値は、「力を入れている」の%

注2) サンプル数は573人

出典 / Benesse 教育研究開発センター「第5回学習指導基本調査(小学校・中学校版)」(2010年)

<http://benesse.jp/berd/> > [調査・研究データ] > [学校・教員の実態や意識について]

言語活動だけでなく、全体的な教師の指導力向上のために校長が「力を入れている」ことで最も高かったのは「教員間の教材研究、授業研究」で3割。次いで「校長による授業参観や指導」が17.1%、「校長からの教育情報の提供」が16.2%だった。「OJT、メンター制度などの若手のバックアップ体制づくり」は、5.6%にとどまった。

3 「先輩・同僚からアドバイスをもらう」教師は、外国語で8割、社会と理科で6~7割

Q. 教科指導や生徒指導に関して、次のことをどれくらいしていますか(回答：中学校教師 / 全体平均・担当教科別)

	全体平均	国語	社会	数学	理科	外国語
校内で教材・授業研究をする	87.1	86.6	85.9	89.2	85.6	87.8
関連する雑誌や本を読む	78.9	83.7	82.8	72.0	77.9	79.3
関連する番組やサイトを調べる	74.1	70.5	79.3	68.2	79.1	74.8
先輩・同僚からアドバイスをもらう	72.9	74.9	66.5	73.5	69.0	80.1
学校外の研修・セミナー(学会、研究会などを含む)に参加する	52.1	58.8	48.6	48.7	47.0	56.9

注1) 数値は「よくする」+「ときどきする」の%

注2) サンプル数は2,827人(国語529人、社会510人、数学636人、理科545人、外国語559人)

注3) 濃いアミかけは全体平均より5ポイント以上高いもの、薄いアミかけは5ポイント以上低いもの

出典 / Benesse 教育研究開発センター「第5回学習指導基本調査(小学校・中学校版)」(2010年)

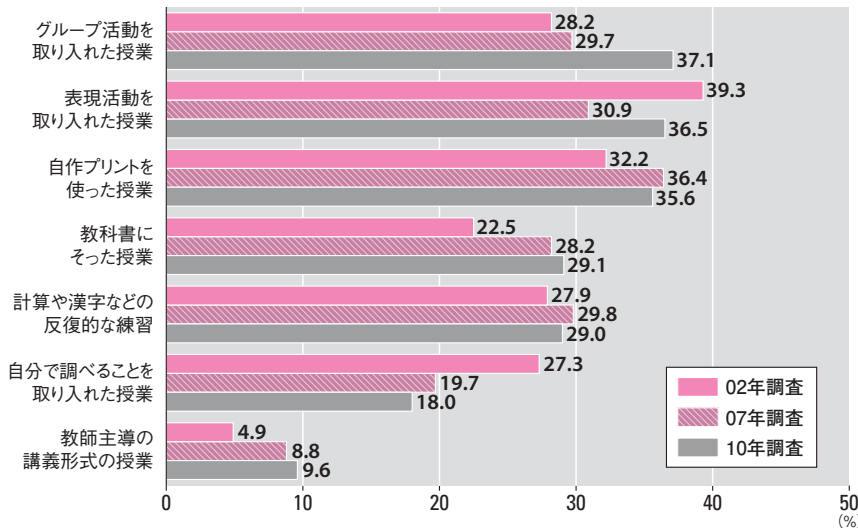
<http://benesse.jp/berd/> > [調査・研究データ] > [学校・教員の実態や意識について]

どの担当教科の教師も「校内で教材・授業研究をする」と回答した比率が最も高く8割5分~9割弱。一方、「学校外の研修・セミナー(学会、研究会などを含む)に参加する」はどの教科でも最も比率が低い。

また、担当教科別にみると、数学は他の教科よりも関連する雑誌や本、番組やサイトによる情報収集が少ない。外国語は先輩・同僚からアドバイスをもらうことが他の教科よりも多い。

4 グループ活動、表現活動を取り入れた授業を心がける教師が増加

Q.教科の授業において、どのような授業方法を心がけていますか
(回答：中学校教師／経年比較)



注1) 数値は「多くするように特に心がけている」の%

注2) サンプル数は、02年調査2,891人、07年調査2,109人、10年調査2,827人

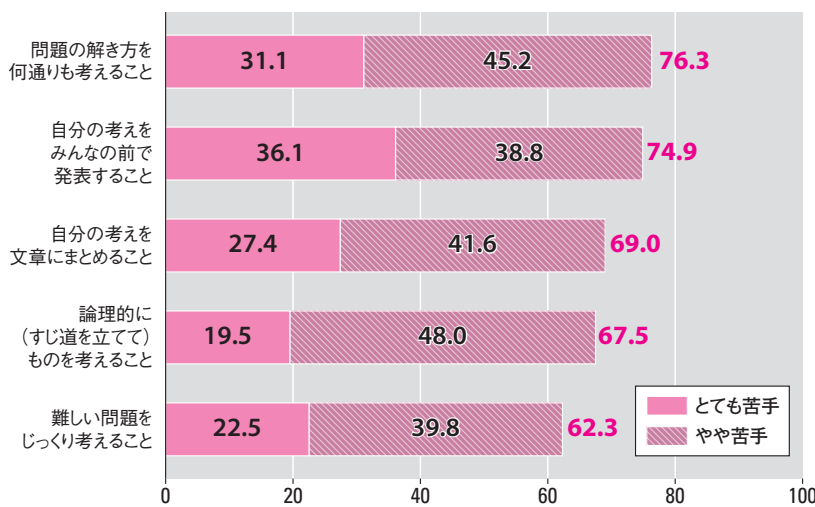
出典／Benesse 教育研究開発センター「第5回学習指導基本調査(小学校・中学校版)」(2010年)

<http://benesse.jp/berd/> >「調査・研究データ」>「学校・教員の実態や意識について」

教師が心がけている授業方法を経年変化で見たところ、「グループ活動を取り入れた授業」は、この9年間で増加している。「表現活動を取り入れた授業」は02年調査から07年調査にかけて一度減少したものの、10年調査では再び増加に転じた。一方、「自分で調べることを取り入れた授業」は減少傾向にある。

5 「考えをみんなの前で発表すること」「論理的にものを考えること」が苦手な生徒は約7割

Q.あなたは次のようなことが得意ですか、苦手ですか(回答：中学生)



注1) グラフ右側の赤字は「とても苦手」+「やや苦手」の%

注2) サンプル数は3,917人

出典／Benesse 教育研究開発センター「第2回子ども生活実態基本調査」(2009年)

<http://benesse.jp/berd/> >「調査・研究データ」>「小学生～高校生の学力・学習について」

中学生の約75%が、問題の解き方を複数考えたり、自分の考えをみんなの前で発表することが苦手だと感じている。また、「自分の考えを文章にまとめること」「論理的に(すじ道を立てて)ものを考えること」を苦手と感じている生徒も7割近い。

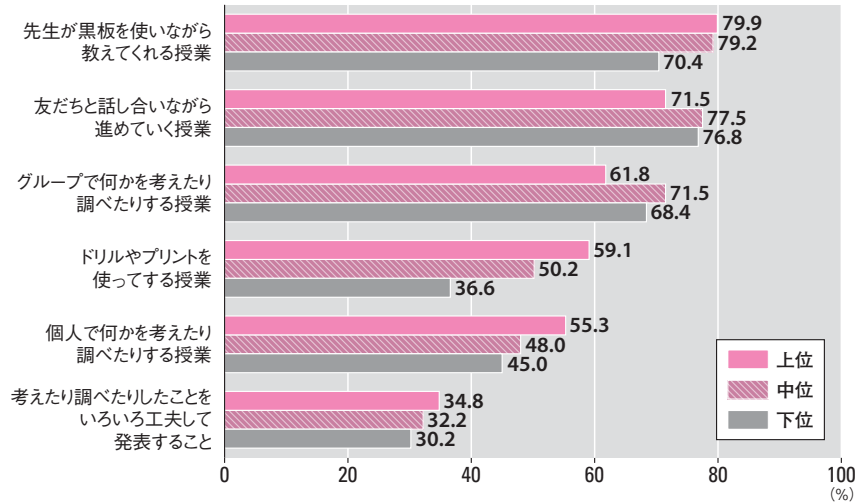
「授業」で生徒を、学級を伸ばす

第2回

言語活動で授業を捉えなおす

6 「ドリルやプリントを使ってする授業」が好きな生徒は、学力下位層で減少

Q. 次にあげる学校の勉強方法は、どのくらい好きですか(回答：中学生/学力層別)



「先生が黒板を使いながら教えてくれる授業」「友だちと話し合いながら進めていく授業」が好きな生徒は7～8割。「ドリルやプリントを使ってする授業」や「個人で何かを考えたり調べたりする授業」が好きな生徒は3～6割で、学力下位層ほど比率が低い。

注1) 数値は「とても好き」+「好き」の%

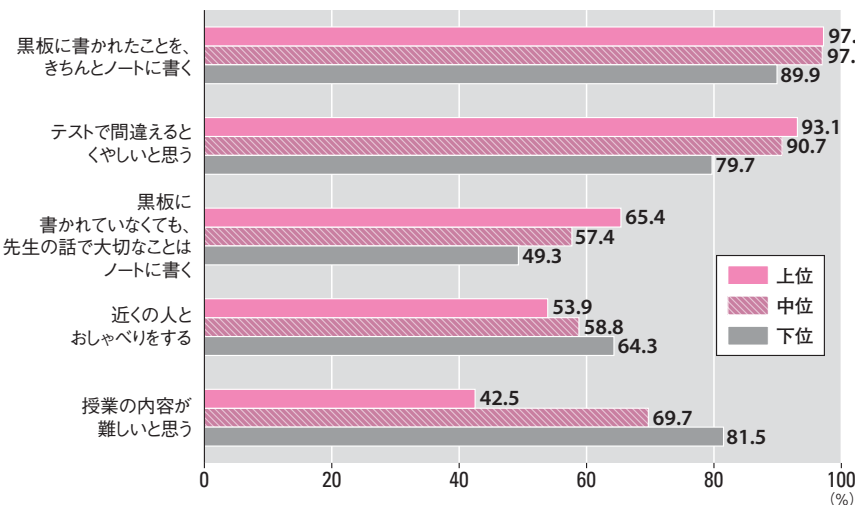
注2) 学力層は、学力実態調査の国語と数学の偏差値の合算から算出(上位492人、中位667人、下位513人)

出典/ Benesse 教育研究開発センター「第4回学習基本調査・学力実態調査」(2006年)

<http://benesse.jp/berd/> >[調査・研究データ]>[学習基本調査]

7 「黒板に書かれていなくても大切なことはノートに書く」生徒は、学力下位層で減少

Q. あなたの授業中の様子についてお聞きします(回答：中学生/学力層別)



「黒板に書かれたことをきちんとノートに書く」生徒は9割と、どの学力層でも比率が高い。一方、「黒板に書かれていなくても、先生の話で大切なことはノートに書く」は学力層によって差が見られ、学力下位層で比率が低い。

注1) 数値は「よくある」+「時々ある」の%

注2) 学力層は国語と数学の偏差値の合算から算出(上位492人、中位667人、下位513人)

出典/ Benesse 教育研究開発センター「第4回学習基本調査・学力実態調査」(2006年)

<http://benesse.jp/berd/> >[調査・研究データ]>[学習基本調査]

2011Vol.1 特集「中学校教育の不易と流行」へのご意見

このコーナーでは、編集部寄せられた読者の先生方からのご意見をご紹介します。

*「VIEW21」中学版のバックナンバーは「Benesse教育研究開発センター」ウェブサイト(<http://benesse.jp/berd/>)でご覧いただけます。

◎「当たり前のことを当たり前でやり続けることが、本来の義務教育の役割であり、揺るぎない学校文化につながる」という全日本中学校長会会長の新藤久典先生の言葉が心にしみました。本校も、学校のブランドづくりまでとはいかなくとも、生徒が楽しく安心して学べる学校づくりに取り組んでいきます。

[茨城県／T中学校／Y・Y]

◎全国連合小学校長会会長の向山行雄先生の「校長はオーケストラの指揮者と同じ」という言葉に感動しました。教師がバラバラでは力を結集できません。個性豊かな教師を束ねることが管理職の役割で、校長のタクト一つでまとめる大切さを実感しました。規模にかかわらず、どの学校も子どもとしっかり向き合い、一つひとつの授業を大切にすることから始めなくてはならないと再認識しました。[鹿児島県／S中学校／S・M]

◎「小中連携」「地域社会との連携」という言葉は多くの学校で流行語のように使われていますが、いざ取り組むとなると各校の事情で具体化しづらい状況にあると思います。今回の特集では中学校の果たす役割や小中連携のテーマについて、細かな取り組みまで述べられ、大変参考になりました。[兵庫県／T中学校／S・K]

◎新学習指導要領で言語活動の充実がうたわれ、ペアやグループの協同学習に注目が集まる中、土岐市立泉中学校のバズ学習はとても参考になると思いました。

[栃木県／I中学校／T・T]

◎土岐市立泉中学校の取り組みは、集団力を付けさせる取り組みとして参考になりました。特に「教師が本気で生徒に期待をかけているか」という言葉に共感し、元気をもらいました。[宮崎県／Y中学校／N・M]

◎隣接学区の中学校との連携を構想していたところだったので、阿智村立阿智中学校の取り組みが参考になりました。[岡山県／F中学校／S・Y]

◎尾花沢市立福原中学校の事例を読み、「授業力」「連携」「協力し合える教師関係」が、生徒の力を育み、夢を実現させる力を引き出すことにつながるのだと思いました。自校での実践のヒントをいただきました。

[兵庫県／S中学校／M・Y]

◎尾花沢市立福原中学校の校内研修の取り組みの中で「自分のための研修が大切」という言葉に共感を覚えました。生徒に分かりやすく教え、自ら進んで学ぼうとする自主性を身に付けさせるために、教師の授業力アップが必要です。さまざまな研修を重ね、教師が共有できる方法を今後も模索していきたいと思えます。

[大阪府／T中学校／Y・A]

◎資料にあった「5割の教師が探究的な学習に不安」という結果が気になりました。私は探究的な学習の中で「確かな学力」が育つと考えています。

[神奈川県／S中学校／T・K]

お知らせ

文部科学省が被災地の学校と提供者を結ぶマッチングサイトを開設しています

「東日本大震災 子どもの学び支援ポータルサイト」<http://manabishien.mext.go.jp/>

編集後記

震災後の混乱の中でも整然と列を成して電車を待ち、支援物資を受け取る被災地の方々の様子が諸外国を驚嘆させたことをご記憶の先生方は多いと思います。このような、自己中心的にならず周囲を思いやり行動するという「ことばが表に出ないコミュニケーション力」に加えて、「ことばを使って表現したり深く考えたりする力」も、中学校の先生方のご指導をもってすれば、同時に伸ばすことが出来る。今回の取材を通じて確信いたしました。(久保木)

VIEW21 中学版 2011 Vol.2

2011年8月6日発行／通巻第310号

発行人 新井健一
編集人 原 茂
発行所 (株)ベネッセコーポレーション
Benesse教育研究開発センター

印刷製本 (株)ビーヴィーコーポレーション
編集協力 (有)ペンダコ
執筆協力 中丸満
撮影協力 川上一生、坂井公秋、ヤマグチイック

◎お問い合わせ先

VIEW21編集部

電話 **03-5320-1287**

〒163-0411東京都新宿区西新宿2-1-1
新宿三井ビルディング13階

©Benesse Corporation 2011